



Title	考古遺跡の活用による観光創造と地域活性化：世界遺産登録を目指す「北の縄文」広域連携
Author(s)	鎌田, 雅人
Citation	北海道大学. 修士(観光学)
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38103
Type	theses (master)
File Information	kamada.pdf



[Instructions for use](#)

平成20年度修士論文

考古遺跡の活用による観光創造と地域活性化
～世界遺産登録を目指す「北の縄文」広域連携～

Tourism Innovation and Regional Vitalization by Utilizing Archeological Site
～ Wide Area Alliance for Northern Jomon Ruins as a Candidate for the World Heritage ~

北海道大学大学院

国際広報メディア・観光学院

観光創造専攻

氏 名 鎌 田 雅 人

考古遺跡の活用による観光創造と地域活性化
～世界遺産登録を目指す「北の縄文」広域連携～

1990年代、青森県の三内丸山遺跡をはじめ、全国各地で話題性の高い縄文時代の遺跡が数多く発見・発掘されたことにより「縄文ブーム」が起こった。遺跡では、住居や建築物が復元され定期的にイベントが開催されるなど、訪れる人々の耳目を集めた。縄文遺跡における土器などの遺物や建物跡などの遺構は、従来そのように、そこに「有る」ものとして展示され、単に「見る」観光の対象であった。

しかし、物的所有欲の充足よりも精神的豊かさ、「幸せの実感」を求める生き方へと価値観が大転換しようとしている今日、縄文遺跡の内に見出せるのは、自然と共存・共栄・共生し、持続可能な生活様式を営んでいた姿勢方針＝「縄文ニズム」であり、その思想的営みをツーリズムによって五感で感得し、「感幸(かんこう)」することが期待されている。

そうした中、2008(平成20)年12月、北海道と青森県、岩手県、秋田県の四道県に広く散在している縄文時代の遺跡群が「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」、すなわち「北の縄文」として日本の世界遺産暫定一覧表に登録された。

これらの縄文遺跡群には、従来のような見られる対象ではなく、周囲の景観や地域の生活文化も併せて、訪れた人のライフスタイルに影響を与えるような感動や、新たな社会システムを構築するためのヒントを与えるような、物語性を有した空間として訪問者を迎えることが求められている。

1950年代、芸術家・岡本太郎は縄文時代の「火焰式土器」に偶然出会い、その造形美や内部に秘められたエネルギーを感じ取って生命的芸術を開花させ、多彩な芸術作品を創作し、建築などの分野にも大きな影響を与えたと言われている。

今日求められているのは、そのような革新的(イノベティブ)な出来事が観光の分野で惹起することであり、地域の暮らしといのちを輝かせ、地域経済を再生へと導く観光の在り方を模索する「ツーリズム・イノベーション」である。

「北の縄文」というテーマは、物質文明の源である世界四大河文明よりも遥かに遡って存在した縄文文化を、安定した暮らしと幸せのあり様として再評価し、世界的意義を問うものである。こうした「ウェイ・オブ・ライフ＝文化」こそ、地球的規模で直面している

様々な危機を克服するための希望となる。

本論文では、縄文文化がこのように「世界の資産」としての意義を有していることを明らかにしながら、その価値を如何に地域振興に結実させるのかという施策を、ツーリズム・イノベーションとの関連で論じ、四道県連携施策の更なる展開の必要性と可能性を論じた。

さらに、近年の考古学上の研究成果をふまえ、日本国内の歴史発展系列とは別に、北東アジアにおけるオホーツクの民やアイヌも含んだ「北の縄文」交流に着目したことで、四道県を北東アジアへの「北のゲートウェイ」として位置づける可能性を見出した。

Abstract

Tourism Innovation and Regional Vitalization by Utilizing Archeological Site

~ Wide Area Alliance for Northern Jomon Ruins as a Candidate for the World Heritage ~

In the 1990s, nationwide discovery and excavation of many fascinating Jomon ruins including Sannai-Maruyama Ruins has generated “Jomon Boom” in Japan. Heated attention was raised among Japanese people by the restored ancient houses and architecture and periodical events at these sites. The Jomon pottery and the remains of ancient architectures were exhibited as they had been there but they used to be merely the objects for sight-seeing.

The Jomon Ruins, however, should be treated in a different way in recent years when there has been a drastic change in a sense of values from the aspiration for material ownership to mental happiness or subjective well-being. What we can see at the Jomon Ruins is the Jomonism, under which people co-exist and co-prosper with nature. Such sustainable lifestyle of Jomon people can be enjoyed through tourism using all five senses of human being.

In December 2008, the ruins in Jomon Period, which were widely spread across Hokkaido, Aomori, Iwate and Akita prefectures, were registered in a tentative list of World Heritage as “Jomon Ruins around Hokkaido and Northern Tohoku Region”; that is to say “Northern Jomon Ruins”.

Now, the Jomon Ruins, including surrounding landscape and regional life culture, should be able to provide visitors with emotional impacts and certain space where the visitors can get a clear hint to construct new social system.

In the 1950s, Taro Okamoto, Japanese artist, encountered “Flame Pottery” of Jomon Period. It is said that Okamoto developed his own vital arts fascinated by the Jomon’s figurative beauty and internal energy. He, then, created various art works and influenced Japanese architecture and other fields as well.

What is expected these days is the outbreak of the innovative things in the tourism field, in other words, “Tourism Innovation” which enlighten regional lives and revitalize regional

economy.

The theme of “Northern Jomon Ruins” is actually to re-evaluate Jomon culture, which existed even much before the Four Great Ancient Civilization, as the way of sustainable and happy life of human being and to appeal its significance to the world. This “Way of Life” (i.e. culture), as a matter of fact, could be the hope to overcome various crises we are encountering on a global scale.

In this thesis, it was verified that Jomon culture has the significance worthwhile for the World Heritage. Then, the various measures to combine the value with regional revitalization efforts were discussed through the necessity and possibility of wide area alliance among Hokkaido, Aomori, Iwate and Akita prefectures in relation to tourism innovation.

In addition, by focusing on northern Jomon ruins and paying an attention to the inter-communication among the people in Okhotsk in the north-east Asia and Ainu in Hokkaido, the possibility of those four prefectures was identified to be located as a Northern Gateway for north-east Asia.

考古遺跡の活用による観光創造と地域活性化
～世界遺産登録を目指す「北の縄文」広域連携～

目次

序章 研究の背景と目的	1
(1) 社会の変遷と縄文文化	1
(2) 「北の縄文」の可能性	3
第1章 縄文時代をめぐる議論	6
1-1 世界四大河文明と「縄文文明」	6
1-2 人類史における「縄文革命」の位置づけ	9
第2章 縄文文化の今日的意義	13
2-1 クリの利用にみる持続可能な生活様式	13
(1) 食糧としてのクリ	13
(2) 建築資材としてのクリの木	14
2-2 家族意識と交流・コミュニケーション	15
(1) 家族との絆	15
(2) ムラ社会とコミュニケーション	16
(3) 交流と交易	18
2-3 受け継がれる精神性と技術	20
(1) アイヌの儀式と縄文の精神	20
(2) 石に祈りを込める	22
(3) 漆を使う伝統文化	24

第3章 北海道・北東北の縄文遺跡群と世界遺産	29
3-1 「北の縄文文化回廊」構想	29
(1) 「北の縄文」の発見	29
(2) アクションプログラムの展開	31
3-2 世界遺産登録への動き	34
(1) 単独提案と再提案	34
(2) 暫定一覧表への記載と課題	38
第4章 観光創造としての「北の縄文」と地域活性化	43
4-1 ライフスタイル・イノベーションと新しい観光のかたち	43
4-2 遺跡の活用と行政の役割	45
(1) 遺跡ガイドの役割と自律的観光	45
(2) 資格制度の創設と雇用の創出	48
4-3 「北の縄文」と広域連携	50
(1) 縄文の「イズム」とツーリズム	50
(2) 広域連携戦略と地域活性化	53
終章 観光立国と「北の縄文」	58
(1) 暮らしといのちを輝かすツーリズム	58
(2) 「いくつもの日本」の視座と「北のゲートウェイ」	59
謝辞	62
参考文献一覧	63

序章 研究の背景と目的

(1) 社会の変遷と縄文文化

1950年代初め、芸術家・岡本太郎は東京国立博物館で縄文時代中期の「火焰型土器¹」(図 0-1)に出会い、その芸術的魅力に衝撃を受けた。著書「縄文土器論」において岡本は、火焰式土器を「超現代日本の美観」と「驚くべき空間感覚」を持っていると評した上で、その逞しさや純粹さを現代に取り戻し、日本の伝統を革新していくべきと主張した²。

縄文土器とその文化に対する岡本の「再発見」は、その後の様々な芸術作品をはじめ、建築やデザインといった分野にも影響を与え、縄文文化が広く注目される契機になったと言われている³。

岡本が遭遇した火焰式土器は、考古学上「遺物」と呼ばれ、石器や装飾品、人骨のように移動可能なモノを指し、博物館など遺跡と全く離れた場所でも見ることができる。これに対して、住居跡や貝塚など土地と一体化していて移動できないものが「遺構」と呼ばれ、発掘現場に行かなければ目にすることができない。

その遺構にも多くの人々が足を運ぶようになったきっかけは、1990年代初め、青森県青森市の三内丸山遺跡で本格的な発掘調査が開始され、大規模な掘立柱建物跡や竪穴式住居跡など、従来の考古学上の常識を覆すような発見が話題を呼んだことであろう(図 0-2)。

その後、1993(平成5)年には栃木県小山市の寺野東遺跡で大規模な環状盛土遺構や木組遺構が、1996(平成8)年には北海道南茅部町(現函館市)の大船C遺跡で大規模集落跡が発見されるなど、縄文遺跡は観光地として脚光を浴び、90年代はまさに「縄文ブーム」といわれる様相を呈した。

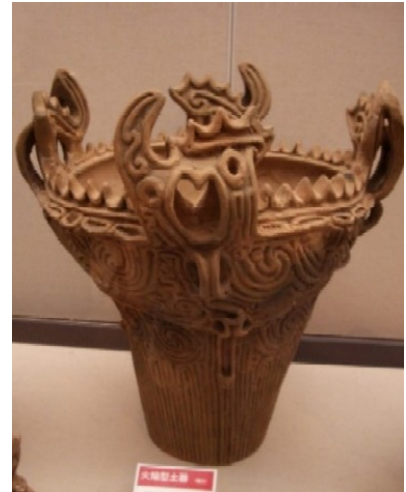


図 0-1 野首遺跡から出土した火焰型土器(新潟県十日町市)



図 0-2 三内丸山遺跡(青森県青森市)の復元された大型竪穴住居(右)と掘立柱建物(左)

この頃、わが国は1990年代初頭のバブル経済崩壊後、いわゆる「失われた10年」と呼ばれ、戦後最長の経済不況下にあった。三内丸山遺跡をはじめとする多くの縄文遺跡の発見や発掘は、そうした時代背景の中で、人々に古代へのロマンや好奇心を与え、明るい話題を提供する役割を果たしたのかもしれない。

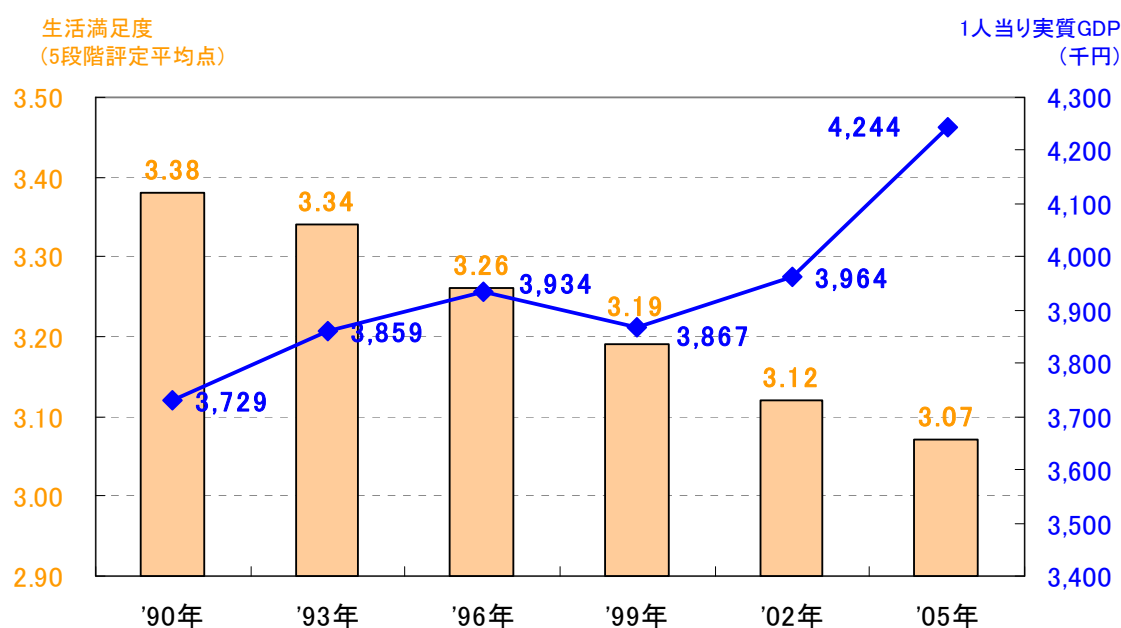
しかし、21世紀に入り、自由主義経済原理に則った構造改革・規制緩和路線が打ち出されたことによって、所得や雇用、医療など社会システムの様々な分野における変革によって生じた「格差」に国民は困窮している。

他方、地球環境の急激な変化に伴う気候変動や食糧問題など生命に関わる危機も顕在化しており、我々は将来への明るい展望もつことや、幸福で豊かな生活を夢見ることが困難な時代に向かっているように見える。

神野（2008）は、こうした状況をアメリカの経済学者リチャード・イースターリンによる幸福感と所得との関係に関する調査研究結果、いわゆる「イースターリンの逆説（パラドックス）⁴⁾」を引用して、次のように主張する。

日本のような一定の物質的豊かさを実現した国では、もはや所有することで豊かになっても、それが幸福になることには直接結びつかない。豊かな者をより豊かにするような経済政策は、結局、誰も幸福にはしない。わが国は「生活の水準の向上から生活様式を充実させるような方向へ」向かわなければならないと⁵⁾。

表 0-1 生活満足度及び1人当たり実質 GDP の推移
(2008年度「国民生活白書」より)



内閣府経済社会総合研究所が2006（平成18）年11月に実施した「幸福度に関するインターネット調査報告書⁶」（30～50代の男女2,100人を対象；複数回答）によれば、「豊かさ」や「幸福」、「生活満足度」に欠かすことのできないもの（構成要素）として挙げられた項目のトップ5は「家族」、「貯蓄」、「将来の希望」、「充実した余暇」、「やりがいのある仕事」である。

また2008（平成20）年度の「国民生活白書⁷」によれば、1990（平成2）年から2005（平成17）年までの間、1人当たりの実質GDPはおよそ370万円から420万円へと50万円ほど上昇しているのに対して、「生活満足度」（5段階評定の平均値；15～75歳男女、N値不明）は3.38から3.07へと逡減してきている（表0-1）。

このように、生活の豊かさにおいて量より質が求められている時代、生活様式の充実、すなわち文化の深化が求められている時代において、縄文遺跡や縄文文化に三たび光が当てられようとしている。

（2）「北の縄文」の可能性

2000（平成12）年4月、地方分権一括法が施行されたことにより、地方の時代、地方分権の推進が声高に唱えられてきたが、一方で三位一体の改革による権限委譲や道州制などの議論はあまり進展していない。それどころか、地方交付税や国庫支出金の削減などにより、各自治体は深刻な財政危機に直面している。

そうした状況下で、北海道と青森県、岩手県、秋田県の北東北三県（以下、「四道県」という。）は、2007（平成19）年12月、この地域に広く存在する縄文遺跡群を一体の文化遺産として捉え、「北海道・北東北の縄文遺跡群」すなわち「北の縄文」として世界遺産登録のための提案書を文化庁へ提出した。

北東北三県の知事は、広域連携や地方分権の推進、将来の道州制への移行に関わる議論などを行うため、1997（平成9）年から定期的な会合、すなわち「知事サミット⁸」を開催していた。「北の縄文」に関する提案はこの「知事サミット」の第7回会合（2003（平成15）年）において承認され、2004（平成16）年度から具体的に取り組みを進めてきたものである。

2008（平成20）年12月、この努力が世界遺産暫定一覧表への登録という形で実を結び、四道県では世界遺産への本登録に向けて更に期待を膨らましている。

「地方の崩壊」などと表現されるような昨今において、この「北の縄文」は、地域や日

本全体にどのようなインパクトをもたらすのか。

本研究では、世界遺産候補となった「北の縄文」を、四道県がどのように活用し地域の活性化に結び付けていけばよいのか、その手法や方向性を検討しつつ、そこにおいて「北の縄文」をめぐる観光はどのような可能性を有しているのか、人々の生活様式を充実させ、豊かで幸福な生活や将来への希望を示すような在り方を生起させることができるのか、という視点で論じていく。

縄文時代に関する日本の考古学研究は「日本考古学史の中ではもっとも古い伝統をもち、かつ豊富な成果をもつ⁹⁾」(戸沢、1995)と言われ、ともすれば遺跡の分類や考証、編年に拘るものとイメージされがちであるが、近年では、当時の社会や文化、人々の心の在り方にまで踏み込んだ分析や研究を行うようになってきている。

第1章では、そうした縄文遺跡に関する考古学上の様々な研究成果や考証に関する文献資料を参照しながら、縄文時代に関するこれまでの認識を改めるような事例に基づき、「世界の資産」としての意義を有していることを明らかにしたい。

第2章ではさらに、縄文時代に営まれた生活や人々の思想、言い換えれば縄文文化というものが有する今日的意義や価値を、遺跡から発掘されたモノやそこから読み取れるコト、あるいは現代社会において縄文文化にルーツを有すると思われる事例と絡めながら明らかにしていく。

岡本太郎の言を借りれば、縄文文化には「新しい角度から発見し、生きかえらせる価値がギッシリと埋もれ」、「あらゆる神秘や超自然のドラマが豊かに生活に入り込んでいる」のであって、そうした縄文時代の精神のあり方を「生きる方法としてつかみ取る」大切さを示すことになる¹⁰⁾。

そして第3章では、四道県が「北の縄文」に着目し、世界遺産登録への取り組みを進めてきた経緯や影響を紹介し、第4章においては、その効果や地域の資産としての遺跡の価値を地域の活性化にどう結び付けていくかという問いに対し、新しい観光の在り方(ツーリズム・イノベーション)とのかかわりで論じながら、四道県への提言を織り交ぜて応えたい。

最後に、「北の縄文」を北東アジアという、より広域なエリアの中で捉え直し位置づけることによって、わが国の国際観光における戦略的な活用可能性についても言及したい。

【注】

- ¹ 図 0-1 の画像は、新潟県十日町市博物館所蔵の実物が長野県御代田町「浅間縄文ミュージアム」に展示されていたものを撮影
- ² 岡本太郎 (1956) : 「日本の伝統」, pp. 73-78
- ³ 石井 匠 (2008) : コラム No. 1 岡本太郎と縄文, 「縄文と岡本太郎」, 信濃川火焰街道ホームページ <http://www.kaen-kaido.com/index.html> に掲載の記事を参照
- ⁴ 「イースターリンの逆説 (パラドックス)」とは、ある一定水準までは物質的な富 (所得) が豊かになることと幸福とは両立するが、その水準を突破すると豊かになることが必ずしも幸福になることとは結びつかなくなる、という状態を指す。
- ⁵ 神野直彦 (2008) : 「地域再生へのアジェンダ」, pp. 36-47
- ⁶ 袖川芳之・田邊 健 (2007) : 幸福度に関するインターネット調査報告書, pp. 5-10
- ⁷ 内閣府 (2008) : 「平成 20 年版国民生活白書」, pp. 57-59
- ⁸ 北海道は、2001 (平成 13) 年 9 月 14 日、岩手県花巻市を会場に開催された第 5 回サミットから参加している。
- ⁹ 戸沢充則 (1995) : 「縄文人の時代」, pp. 3-6
- ¹⁰ 岡本太郎 : 上掲書 (注 2), pp. 94-101

第1章 縄文時代をめぐる議論

1-1 世界四大河文明と「縄文文明」

縄文時代の定義や時代区分については、考古学上、現在も論議があるところであるが、本論では、松木（2007）などの最近の学説に従い、今からおよそ1万5千年前から2千8百年前までの約1万2千年間の時代として論を進めていく¹。

松木によれば、縄文時代は一般に草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の六つの期間に分けられ、これらはまた、草創期から中期までが「前半期」、後期と晩期が「後半期」として大別されることもある。わが国最大規模の縄文遺跡として知られる三内丸山遺跡は、この前半期最後の時期、すなわち今から約6千年前から4千5百年前の約1千5百年の間営まれていた大規模集落であるとされている。

一方、同時代のアジアに目を転じると、いわゆる四大河文明といわれる文明、すなわちチグリス川・ユーフラテス川流域のメソポタミア文明、ナイル川流域のエジプト文明、インダス川流域のインダス文明、黄河流域の黄河文明²は、それぞれ約5千5百年前から3千6百年前の間、上述の縄文時代の区分にもとづいて位置づければ、縄文時代中期から後期にかけて出現している。この関係を図示したのが図1-1である。

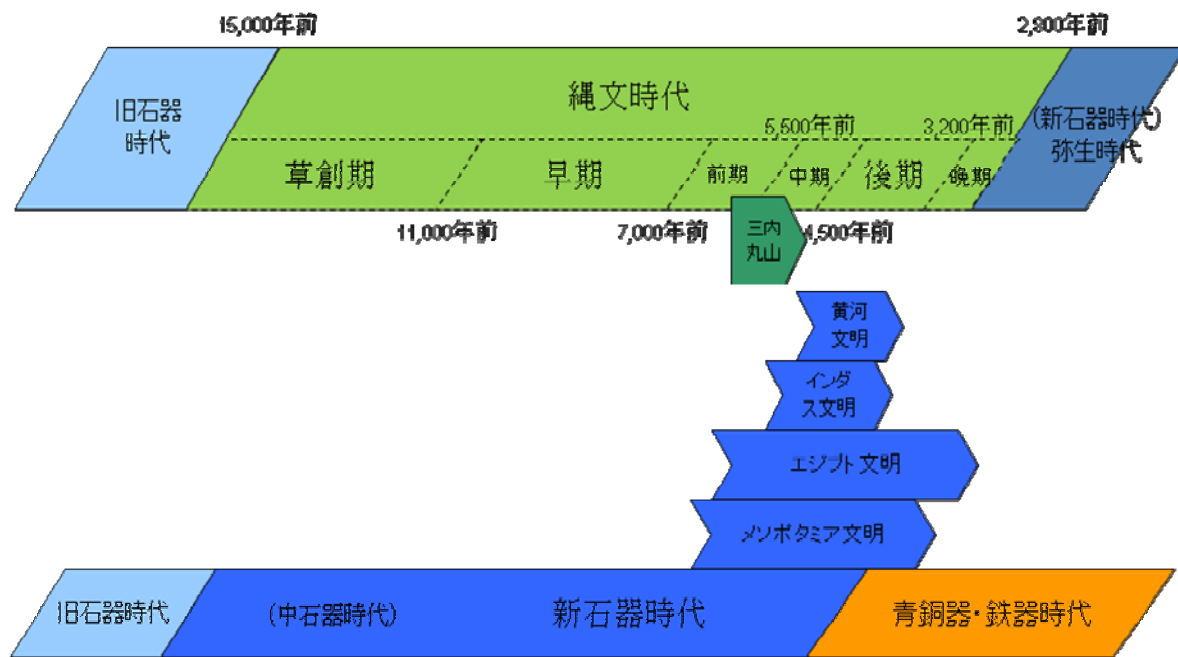


図1-1 縄文時代の区分と四大河文明

例えばメソポタミア文明は「都市文明」と言われているが、松本（1996）によれば、その生成の要因は灌漑農耕による大麦や小麦など穀物生産の拡大にあった。穀物生産の余剰は他の物資との交換・交易に用いられ、その結果、多量の穀物を生産し管理することができるところに「富」が蓄積され、「都市」が形成される。その都市を中心に展開される経済・政治・宗教活動が文明を生むことになったという³。

富の源泉となる大麦や小麦の栽培には稲作ほどの大量の水は必要なく、また栽培場所も平坦地とは限らず、傾斜地においても十分生産は可能である。梅原（1995）は、草原地帯に始まったムギを栽培する農耕が、生産量の増大とともに森林地帯も耕作地に変えることとなり、家畜の放牧用としての牧草地の拡大とあいまって森林の破壊を急速に進行させることになったと指摘する⁴。

こうした古代西アジアに成立した文明と同時代に存在したわが国の縄文集落では、なぜ本格的な農耕が発達していかなかったのか。

常木（1995）は、西アジア地域の中でもメソポタミア文明が生まれたチグリス川・ユーフラテス川流域の一角において、世界で最も早く農耕が始められた要因は、「森林、草原、砂漠という異なる植生が隣接」する自然環境が存在していたところにあると指摘する⁵。

西アジアにおける新石器時代の人々は、最初、森林とその周縁の疎林地帯で採集できる様々な植物資源を利用し開発することによって定住を始めた。その後、採集・狩猟を主体とする生活を続けることで次第に草原地帯においても定住し始めるようになる。その草原地帯に生育する草木植物を栽培しようとする試みが新たな資源の発見や技術の発達につながっていった。

定住地域が広がり、あるいは人口の増加などにより、利用できる草原地帯が限られてくると、今度はユーフラテス川流域の河川低地へと進出していくこととなり、新たな変化が起こる。常木はこのように、「ある自然環境下で成立した生活様式を別の環境下へ持ち込む」ことによって農耕文化が発達し文明の成立につながっていくと説明する。

一方、縄文時代のわが国は、このような状況とは対照的であった。常木は、広大な森林に覆われ大草原が存在しなかったことが農耕文化を発展させられなかった大きな要因だという。

この点に関連して安田（1995）は、西アジアで農耕の技術が発生・発達していった要因は、人々の生活領域が「森と草原のはざま」にあったからであるとし、わが国の場合は、「森と海のはざま」に存在していたことが農耕社会へすぐには向かわせなかった要因であ

ると分析する⁶。

「森と草原のはざま」では、森林や周縁部の疎林地帯における様々な植物資源を利用することが可能であったが、当時の気候変動などの影響により食糧確保が困難な状況に陥ったときに、草原地帯において新たな草木資源を利用する革新的技術が生まれたに違いないという。

その一例として挙げられるのは、佐藤（2007）が指摘するような草原や疎林地帯に火を入れて食用植物を栽培する、いわゆる原始的な焼畑の手法であろう⁷。佐藤によれば、古代西アジアにおいて農耕がおこなわれていたと推定されている時代の地層から多量の炭が検出されている。このような事実から、疎林地帯を開墾するために火が使われていた可能性が高いと主張する。

また、安田の主張するとおり、縄文時代の集落が「森と海のはざま」に多く立地していたとしても、草原地帯が皆無であったとは断言できず、まして火山活動の多い日本列島においては、火山噴火による火災の副産物として偶発的に草原が出現し、あるいはその状況を目撃した縄文時代の人々（以下、「縄文人」という。）が、草木資源の利用における焼畑技術に関するヒントやきっかけを掴んだ可能性も否定できない。

そのような意味では、常木や安田が言及するところの縄文時代において農耕が発達しなかった理由を「大草原が存在しなかった」ということにのみ帰するのでは不十分である。むしろ、安田が指摘した海の存在、すなわち、食糧確保という視点からの海洋資源（魚介類）が豊富であったことが重要ではないのか。

1877（明治10）年、アメリカの動物学者エドワード・モースは、東京都品川区で大森貝塚を発見したが、そのような縄文時代の貝塚の数は、樋泉（2001）によれば、わが国で数千か所にのぼり、そのうちの過半数は東京湾沿岸部を含む関東地方に集中して発見され、世界でも有数な貝塚密集地域となっている⁸。

また、三内丸山遺跡で発掘された食用の魚類の骨は、今日、陸奥湾で獲れる主だった食用魚がほとんど含まれており、その出土する量の膨大さや魚骨の様々なサイズから漁網が使われていたことも窺がわれ、漁業技術としてはかなり確立された水準にあったという。

このような当時のわが国の自然環境、とりわけ食糧としての海洋資源が豊富であり、その確保のための技術も発達していたことが、農耕による穀物資源に過度に依存する必要を生じさせなかった大きな要因であると考えられる。

それ故、農耕文化への移行から文明の成立へという発展過程をすぐには辿らずに、結果、

自然環境を大きく損ねることなく維持することができたのではないか。補足すれば、そのような状況が長く続いたおかげで、自然の摂理に逆らわず、うまく利用し活かしていくという工夫や思想が生まれ、磨き上げられていったとも言える。

鈴木（2006）は、ユーラシア大陸における諸文明の気質と日本文化の基層にあるものの決定的な違いを動物性食糧源の違いに見出せるとし、前者における共同体を「牧畜＋穀物（主に小麦）複合体」、後者のそれを「魚介＋穀物（米と雑穀）複合体」または「魚介型・植物的原理文明」と呼んだ⁹。

「牧畜型」である西欧文明では、羊の遊牧から想像されるように、「他者（対象）としての生き物を支配下において、その行動を制御する」という観念が発達したが、「魚介型文明」では対象（魚類）の行動を意のままに操ることが困難であるが故に、全く異なる世界観を生むことになったと説明する。この説は、まさに先の筆者の主張の裏付けとなる。

このように、西アジアの諸文明は、農耕・牧畜文化に集中したことで文明を築き上げ、都市国家を形成し、多消費型の社会へいち早く移行していったが、その過程では森林伐採や草原の砂漠化など自然環境の破壊を招いた。

一方、同時代の日本列島には、採集・漁労・狩猟による食糧確保のバランスをうまく保ちながら、自然環境を大きく損なうことなく長期間にわたり生活を営み維持していた「縄文文明」が存在していたのである。

自然環境の保全が世界共通の課題とされている今日、わが国の「縄文文明」の思想や生活様式を再評価し、広く世界に知らせ情報発信していく意義がここに存在している。

1-2 人類史における「縄文革命」の位置づけ

前節では、縄文文化について同時代の西アジアに成立していた諸文明と比較しながら論じてきたが、世界史あるいは人類史上は、どのように位置づけられ、またどのように理解すればよいのか。

例えば、わが国の学生が中学や高校などで縄文時代について学ぶ際、大抵は「日本における」縄文時代という但し書きが添えられる。それでは世界の中ではどうだったのか、という問いに関して、日本人の認識や理解はかなり曖昧であるように思われる。

実際、日本の高等学校で使用されている教科書の記述を見ると、日本史の教科書においては、縄文時代について約4ページにわたり図絵入りで丁寧に記述されている。他方、世界史の教科書では、敢えてそのような編纂の仕方をしているものと推察されるが、東アジ

ア地域での文明の起こりに関する章においてすら、縄文時代については全く触れられていない¹⁰。

1936年、イギリスの考古学者ゴードン・チャイルドは、著書「文明の起源」においてイギリスにおける産業革命のもたらした影響に着目し、先史時代においてもいくつかの革命的出来事が認められることを提唱した。その中で、人類の「経済を変えた第一の革命」を「新石器革命（または農業革命）」という概念で説明する。すなわち、人類は磨製石器や土器の発明・生産と同時に「栽培と耕作を行うことにより自分の食料供給を支配するようになった」ことで飛躍的な変化を体験したというのである¹¹。

小林（2008）は、わが国の考古学あるいは歴史学における議論が、このチャイルドの概念に囚われ、縄文時代において本格的な農耕の開始が確認されていないことをもって縄文時代を新石器時代とはみなさない。そのために縄文時代のグローバルな視点での位置づけが定まらず、絶えず「日本における縄文」時代という限定的な捉え方になってしまう、ということの問題視する¹²。

レンフルー（2008）は、チャイルドの功績を「土器の破片や石器だけに着目するのではなく」、「基盤となる環境的要因から予測可能な社会的変化が必然的に生じる過程を考えていた」という点で、当時の考古学上、非常に斬新的であり評価すべきとしている。しかし一方で、この概念の適用範囲を、「あくまでエジプトとシュメールとインダス川流域のみにとどめ」ていたに過ぎないとも言及している¹³。これは、チャイルドの概念を、わが国の縄文時代にむやみに当てはめる必要がないということを示している。

小林は、日本列島における縄文時代には、旧石器時代とは明らかに異なる「画期的な出来事」が確認されており、旧石器時代から発展した第二段階であることは明白であると指摘する。

この「画期的な出来事」の一例は、縄文土器（Cord Marked Pottery）の発明そのものである。土器は粘土製の容器を焼くことで水に溶けないものに変質させるという化学変化を利用した点において確かに画期的なものであったが、そればかりでなく、青森県外ヶ浜町の大平山元（おおだいやまもと）遺跡で発見された土器（図 1-2）¹⁴は、



図 1-2 大平山元 I 遺跡（青森県外ヶ浜町）から出土した日本（世界）最古の縄文土器片

今から約1万6千5百年前のものと測定されており、今のところ世界各地で発見されている土器の中では最古のものとされている¹⁵。

土器はまた単なる入れ物としての機能だけでなく、先に示した火焰式土器のように造形上、非常に特徴的である。松木によれば、「機能を超えた凝りあるいはメッセージ性」が強く盛り込まれている¹⁶。小林は、このような土器が発明されたこと一つを取り上げても、縄文時代の変革は「縄文革命」と呼べるのだと主張する。

以上の事実を踏まえたうえで、縄文時代を人類史上の新石器時代に区分される時代として基本的に位置づけ、その中で本格的な農耕を展開していった文化（文明）と農耕に依存しなかった文化、あるいは農耕に依存しなくとも社会を維持していくことができた文化（＝縄文文化）が存在していたと捉え理解すべきであるというのが小林の主張である。

付言するならば、わが国の考古学や歴史学の研究者は、西欧の学問概念に隷従するのではなく、そのような定義や主張を日本から発して広く世に問うべきであるという苦言として受け取れる。

いずれにせよ、このような認識に立って縄文時代を捉えることにより、縄文時代の位置づけは、日本の国内史だけにとどまらず、世界史上または人類史上、注目すべき重要な意味を持っていることが理解できる。

以下に、四大河文明と「縄文文明」の特徴を比較・整理した表を参考までに示す。

表 1-1 四大河文明と「縄文文明」の比較

	四大河文明	「縄文文明」
成立期	約5千5百年前～	約1万5千年前～
成立(立地)条件	森林と大草原、大河川の存在 「森と草原のはざま」	森林地帯（落葉広葉樹林）中心 「森と海のはざま」
生業の中心	農耕（ムギ）、牧畜、採集 「牧畜型」	採集（クリ）、漁労、狩猟 「魚介型」
自然環境との関係	力(技術)により耕作・開発し制御する；対立的	自然の摂理に逆らわず食糧を得る；調和的
形成された社会	都市国家	ムラ社会 *第2章 2-2 で後述

【注】

- ¹ 松木武彦 (2007) : 「列島創世記」, pp. 61-69
- ² 中国浙江省で 1970 年代に発掘された河姆渡(かぼと)遺跡は、今から約 8 千年から 6 千年前頃のものとして推定され、稲作がおこなわれていた痕跡が発見されている。また、遺構からは住居が高床式であったことも確認されていることから、この遺跡は黄河文明とは明らかに異なるものとして「長江(揚子江)文明」と呼ばれている。したがって、従来の古代中国文明＝黄河文明という図式は今日あまり用いられなくなっている。
- ³ 松本 健 (1996) : メソポタミアにおける都市文明の誕生, 「都市と文明」, pp. 30-41
- ⁴ 梅原猛 (1995) : 農耕と文明, 「農耕と文明」, pp. 1-22
- ⁵ 常木 晃 (1995) : 西アジア型農耕文化の誕生, 「農耕と文明」, pp. 127-142
- ⁶ 安田喜憲 (1995) : 農耕の起源と環境, 「農耕と文明」, pp. 116-126
- ⁷ 佐藤洋一郎 (2007) : 地球環境と焼畑, 「季刊 東北学」, pp. 50-55
- ⁸ 樋泉岳二 (2001) : 貝塚の時代～縄文の漁労文化, 「海が育てた森の王国」, pp. 127-143
- ⁹ 鈴木孝夫 (2006) : 「日本人はなぜ日本を愛せないのか」, pp. 75-123
- ¹⁰ 黛弘道ほか 13 名 (1998) : 「日本史 B」, pp. 8-11 / 尾形勇ほか 7 名 (1997) : 「世界史 B」, pp. 11-13
- ¹¹ ゴードン・チャイルド (1969) : 「文明の起源 (上)」, pp. 110-171
- ¹² 小林達雄 (2008) : 「縄文の思考」, pp. 25-39
- ¹³ コリン・レンフルー (2008) : 「先史時代と心の変化」, pp. 59-66
- ¹⁴ 図 1-2 は青森県ホームページの「青森県の縄文遺跡群」より転載 [外ヶ浜町教育委員会承認]
http://www.net.pref.aomori.jp/aomori_jomon/index.html
- ¹⁵ 小林 (2008) によれば、世界における土器の発明地は少なくとも 3 カ所あり、約 7 千 5 百年前の南米アマゾン川流域、約 9 千年前の西アジア、そして約 1 万 6 千 5 百年前の縄文時代を含む東アジアであるという。
- ¹⁶ 松木武彦 : 上掲書 (注 1), pp. 93-100

第2章 縄文文化の今日的意義

本章では、わが国の縄文時代に関する考古学上の研究成果を踏まえ、いくつかの具体的な事象を取り上げながら、縄文文化やその今日的意義について紹介する。

2-1 クリの利用にみる持続可能な生活様式

(1) 食糧としてのクリ

縄文時代における食糧資源確保の手法は採集、漁労、狩猟であったが、その中心となったのは採集であり、クリやクルミ、トチの実¹など植物の実が主要なものであって、その中で最も多く食糧として用いられたのはクリであった(図2-1)²。

佐藤(2005)は、三内丸山遺跡から出土した多数のクリの實のDNA分析を行い、その個体間の遺伝子の近似性の高さから、クリの木が栽培されていた可能性が非常に高いと結論づけている³。

ここでいう栽培とは、今日のクリ園の様子とはかなり様子が異なり、かなり粗放なものであったと想像されているが、定住し集落を形成していく過程で、遠くの山中まで出かけなくとも身近な場所で容易にかつ安定的に多くの食糧を確保するための知恵と工夫によるものと考えられる。

佐藤はまた、クリやクルミなど木の實の採集だけでなく、自然に生育するヒエやアワなど、今日では「雑穀」と呼ばれているような食用植物も広く活用していた可能性に言及し、その際の耕作手法として、やはり火(焼畑)を用いたのではないかと推測している(図2-2)⁴。

理由として、同じ耕作地を利用して繰り返し栽培を行うと、土地の生産力は低下し害虫や雑草は増えるが、焼畑の場合は毎回



図2-1 御所野遺跡(岩手県一戸町)から出土した炭化したクリの實(円内)



図2-2 現代の日本における焼畑の事例(山形県鶴岡市温海地区)

耕作地を変えて循環的に利用していくことから、食用植物の多様性を維持し、病原菌や害虫の特定種が増えるのを防ぐ効果が得られることを挙げる。加えて、収穫における効率性は低くなるものの、安定性や持続性は高まるからである。

田嶋ら（2008）によれば、草木を焼くことによってリンやカリウム、マグネシウムなどが灰の中に残り、木の生育には十分な養分となるという⁵。農薬や肥料などがなかった時代に、植物の生育を管理するためには焼畑は非常に有効な手段であったに違いない⁶。

（2）建築資材としてのクリの木

縄文時代におけるクリの木はまた、建築資材としてもよく用いられていた。岩手県一戸町の御所野遺跡では、1996（平成 8）年春に竪穴住居跡から多数の炭化材が発掘されたが、それは火事により焼失した住居の建材であり、材質はクリであることが確認されている（図 2-3）。



図 2-3 復元中の大船 C 遺跡の竪穴住居（北海道函館市南茅部地区）

山田（2004）は、特に東日本一帯で発見されている縄文遺跡の建材を分析し、その 9 割がクリの木であり、それらが自然林ではなく管理され栽培された林から伐採されたものである可能性を指摘している⁷。

自然の林の中で生育したクリの木は、普通、多くの枝を四方に伸ばし真っすぐには生長しない。しかし、一定範囲の、ある程度密集した状態で生長する、つまり栽培されれば、ほぼ真っすぐに伸びる。

また、他の樹木と比較してクリの木は生長期には柔らかく伐採しやすいという特性があるほか、生長が早く、20～30 年ほどで直径 20 センチメートルほどに達するため、適当な太さの建材として使えるようになる⁸。さらに一旦乾燥させると非常に硬くなる性質があり、強度の面でも問題ないという。今日でも、鉄道の枕木や街路歩道の木製タイルなどの材料として使われている理由は、クリの木のこのような性質を利用したものである。

山田（2001）はまた、様々な竪穴住居跡の遺構を計測した結果、住居の建替え頻度が 20～30 年であることを確認し、縄文人の平均寿命が 30 歳前後と推定されていることを考え合わせ、縄文人はクリの木の生長サイクルを自らのライフサイクルに組み込んでいたと言える、と結論づける⁹。

このように、縄文時代においては、食糧としてクリの実を採集するだけでなく、建築資材としてもクリの木を利用することで、自然の恵みを有効活用していたことが理解できる。そこでは、単に効率性を求めるのではなく、20～30年という年月を見据えて自然の再生力や復元力を活かし、継続的な生産活動を行っていたことも窺える。

こうしたライフスタイルは、食糧の確保という視点で捉えれば、まさに自給自足の生活を実践していたということになる。今のところ縄文時代において穀物など大量に保存可能な作物を日常的に利用していた形跡が確認されていないため、必然的にそうせざるを得なかったという面もあるが、必要な量を必要な分だけ確保し消費するスタイル、換言すれば、無駄な消費や無理な生産をしないという姿勢は、今日の我々の生活様式においても問われていることである。

2-2 家族意識と交流・コミュニケーション

(1) 家族との絆

前節で取り上げた小林の「縄文革命」論では、定住の開始が画期的出来事の一つとして挙げられているが、新石器時代で定住が始まるという生活環境の変化については、住居に用いた建材や材料の違いはあるにせよ、他の文明地域においても等しく認められる現象であり、縄文時代特有の出来事ではない。

このような認識に対して山田（2004、前掲）は、定住が始まった縄文時代について「家族ができた時代」として捉えることでその意義を強調する。遊動生活であった旧石器時代においても、夫婦や親子といった関係が存在したであろうことは疑うべくもないが、住居を構えること、すなわち一つ屋根の下で暮らすことで、「家族」というものの認識や概念を明確化することになったのだと主張する¹⁰。

縄文時代の竪穴住居は基本的に円形や楕円形をしており、平均的なもので直径4m前後あり、大人と子供併せて3～4人が寝起きするには十分な広さである（図2-4）。

今日でいうところの三世代同居用というよりは核家族向けと考えられるが、そのような空間で生活を共にする一体感が、家族の絆



図2-4 復元された御所野遺跡の竪穴住居（岩手県一戸町：前掲）

といえるような感覚を強める作用があったことは十分理解できる。

北海道函館市南茅部地区の垣ノ島遺跡から発掘された土板は、そのような縄文人の家族における情愛の深さを想像するには十分な例である（図 2-5）¹¹。

この土板は乳幼児の足形が付いているもので、紐を通すための穴が開けられている。これは、首に掛けていたか壁などに吊るしていたことを示している。また、五指や足の裏全体が均等に粘土に押し付けられていることから、子供があまり動かない状態、例えば寝ている時、あるいは亡くなった際に足形をとったものではないかと考えられている。さらに、これらの土板のほとんどが、成人が埋葬されていた墓から一緒に発掘されており、足形をとられた本人が自らの誕生・成長の記念品として永らく所持していたか、あるいは幼くして亡くなった子供の形見として親が持ち歩き、自身が亡くなった際に一緒に埋葬されたものではないかと推測されている。



図 2-5 足形付き土板（北海道函館市・垣ノ島 B 遺跡出土）

大木（2005）は、1990年代のわが国において、社会や地域や家庭内において凄惨な事件が相次いで発生するなど「壊れはじめた日本社会」の変質の状況を「関係性喪失の時代」と表現したが、その原因の一つとして社会の基本単位である家族や家庭の在り方そのものの崩壊・変質を指摘している¹²。

木村（1997）は、文明化の進展により家族の崩壊は避けられないとし、その理由として家庭という「学習の場」で教える（伝える）・教わるという相互作用あるいはコミュニケーション機能が衰退し、それに伴って「家族の絆や心」を喪失していくからであると指摘する¹³。この「家族の絆や心」こそ、定住生活の始まりと共により強く意識されるようになり、縄文時代から今日まで、日本人が無意識に受け継いできた感覚であろう。

序章で触れたように、現代人は幸福や豊かさ、生活の満足度を高める上で、「家族」を最も欠かすことのできない要素として挙げているが、それを確かなものとするためには、一つ屋根の下で暮らしていることの意味を再確認し、互いの存在のかけがえのなさを実感し感謝するところから始めることが重要なのではないか。

（2）ムラ社会とコミュニケーション

小林（1995、2008 前掲）は、住居を構えて定住をはじめたことによる変化について、「ウ

チ」と「ソト」そして「イエ」という概念が明確化するようになったと説明する¹⁴。「壁によって遮られ、ソトとはっきり区別される独自の空間」としての「ウチ」＝「家（イエ）」を持つことで、「心の安らぎ場所」を得ることができたのだという小林の主張は、結論として定住化により「家族意識につながる契機が生まれ」たというところに至り、先の山田の見解との一致が見られる¹⁵。

小林はまた、「ハラ」や「ソラ」、「ムラ」、「ヤマ」といった言葉が同じような音を含むことに着目し、これらの概念が基本的には定住をはじめた縄文時代において成立し、今日まで残ってきたものではないかと指摘している。これらの言葉の概念に関する小林の解釈は、次のように要約することができる（図 2-6）。

すなわち、「ウチ（家）」の「ソト（外）」には「ハラ（原）」が広がっていて、その先に「ヤマ（山）」があり「ソラ（空）」がある。「ハラ」の「ウチ（内）」に「ムラ（村）」があり、「ムラ」と「ハラ」は縄文人の日常生活圏を構成する要素であり、彼らの「ハラ（腹）」を満たす自然資源の宝庫として利用していた、ということになる。

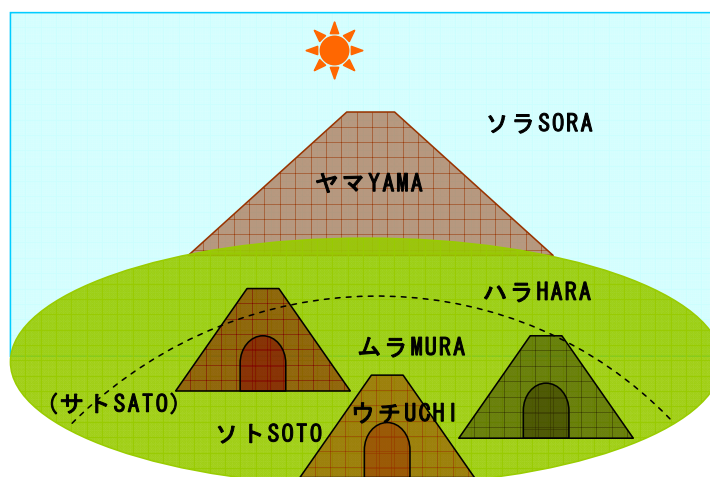


図 2-6 縄文人の空間認識に関するモデル図（小林(2008)などの説に基づき筆者作図）

松木（2007、前掲）は、定住化によってもたらされた変化として、「人と場所との絆の蓄積」が進み、「サト」ともいふべき「新しい性質の空間」ができたことが注目されると指摘する。ここでいう「サト」とは、小林のいうところの「ムラ」と「ハラ」の概念を併せ持つようなものと考えられるが、そうした場所で複数の人間（家族）が長い間暮らすことで、社会的コミュニケーションが活発に行なわれ、人々の関係が密接かつ永続的になる。そうした社会性の発展、「サト」の形成の過程で、メッセージが込められた人工物、例えば土器や装飾品などを作って交換し合ったり、その製作技術を競い合ったりすることが「物質文化を発展させる起爆剤」となったという。

松木はまた、ホモ・サピエンスである我々は、このような手法も含めて「お互いの位置づけを確かめ合い、無駄な衝突をせずに暮らす」ためにコミュニケーションの密度を高め

る知恵を持っていたはずであると指摘する。

翻って今日の我々は、アパートやマンションなど一つ屋根の下に多数の区切られた「ウチ(家)」が存在する「立体的ムラ社会」とでもいえる状況で生活しているが、不思議なことに、無駄な衝突を避ける意識はあるとしても、そのために必要なコミュニケーションすら避けようとしているように見える。縄文時代の「ムラ」と違う点は、「ハラ」あるいは「サト」というような場がほとんど存在しないことであるが、それがコミュニケーションの成立を阻害している要因なのであろうか。

とすれば、現代人にとって今必要なのは、家庭内や地域社会においてコミュニケーションの密度を高めることであり、そのためには、現代における「ハラ」や「サト」となる場へ出かけ、そこに集う人々、あるいはそこに住まう人々と交流することが有効なのかもしれない。

(3) 交流と交易

定住化がもたらしたもう一つの注目すべき変化は、松木(2007、前掲)によれば、人が動かなくなった代わりに、「物を動かすネットワークの仕組み」ができたことであるという。

縄文時代、日本列島の各地に「ムラ」が形成され、それぞれの「ハラ」や「サト」における主要な食糧源が定まると、自分たちの「サト」では手に入らない産物を入手しようと、縄文人は情報を入手し資源を交換したはずである、と松木は主張する。しかし、通信手段がなかった時代に、情報の伝搬は口伝てで行われたはずであり、やはり人が動かなければ情報は伝わらない。その意味では、人もモノも実はかなりダイナミックに動いていた、というのが実際のところ

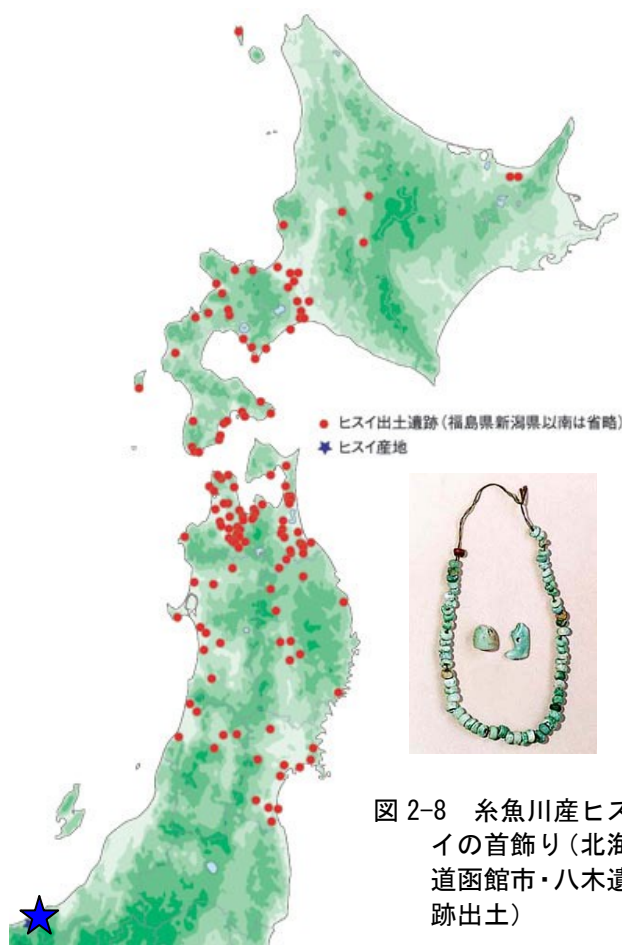


図 2-7 縄文時代におけるヒスイの原産地と出土遺跡の分布図

図 2-8 糸魚川産ヒスイの首飾り(北海道函館市・八木遺跡出土)

ろであろう。

勅使河原（1995）は、縄文時代におけるモノの動きは、一つのムラという限られた集団単位ではなく、いくつかのムラから組織される大きな共同体間において、計画的・組織的に行われていた可能性を指摘している¹⁶。

これまでの遺跡における遺物の調査において食糧資源の交換の証拠はほとんど発見されていないが、石や玉などの出土品に関しては、その成分の化学的分析から産地や出所を特定することができる。

例えば、打製石器を作るのに適した黒曜石は、現在の北海道遠軽町白滝地区や長野県長和町鷹山地区、伊豆半島沖の神津島などが主要な黒曜石の産地とされているが、その原石から製作された石器が、近隣地域はもちろんのこと、数百キロメートルも離れた場所においても発見されている。

また、装飾品としての玉の原料になるヒスイは、新潟県糸魚川市が国内有数の原産地であるとされているが、この製品は北海道から九州にいたるまで運ばれていたことが明らかにされている（図 2-7, 8）¹⁷。

三内丸山遺跡においては、こうした黒曜石やヒスイ、琥珀、天然アスファルトなどあらゆるものが揃って出土しており、しかも完成品ばかりでなく、原石や加工途中のものまで含まれている。

これらの事実も踏まえて、勅使河原は、三内丸山遺跡は「遠隔地の部族との物資の流通中継基地」であり、共同体を組織する各ムラへの「配送センター」的役割を持っていた。奥行き 32m もある大規模な竪穴住居はそのための施設ではなかったかと推測する（図 2-9）。



図 2-9 復元された三内丸山遺跡の大型竪穴住居（青森県青森市）

このように、定住し集落が形成され、そこで必要とされる様々な物資のうち身近にない日用資源を入手しようと積極的な交換・交易が行われた。それが人の交流や情報の伝達を活発にさせる要因になったであろうことは容易に想像される。松木はまた、特に異文化を持つ遠隔の集団との交流と交易によって「自己意識や自尊心が刺激」され「自分たちの文化の中身がより明確に意識化されるきっかけ」になったと主張する。

ここ数年、日本の台所と言われる東京都中央区の築地市場には多くの外国人観光客が訪れ、セリの現場の見学や市場内の観光を楽しんでいる。市場の魅力は全国各地から様々な食料品が集まっていることに尽き、その取引の様子が間近で見物できることなども人気を呼んでいるという¹⁸。

モノが集まり、人が集まり、そこで様々な気付きや発見や出会いがあるのは縄文時代においても同様であったことは想像に難くない。特に、モノを介して人と交わる際には、言葉や文化の壁を越えて、好奇心を呼び起こし我々の五感を刺激する。

今日、ICT (Information and Communication Technology) の進歩が情報の動きを飛躍的に加速させ、ときとして情報だけが独り歩きしているような状況にある。だからこそ、我々にとっては自分の目で見て、聞いて、触れて、味わって、感動を得られるような、モノを介した交流の楽しさというものを体感することが大切なのではないか。

2-3 受け継がれる精神性と技術

(1) アイヌの儀式と縄文の精神

西山 (2001) は、文化遺産としての考古遺跡では、多くの場合、遺跡やそれを生み出した文化とそれを取り巻く今日の人間社会との間に断絶が避けられず、そこにヘリテージツーリズム展開の悩みがあると指摘する¹⁹。

これは、遺跡の有する価値や意義を誰がどのように伝えるかという問題として捉えることができる。考古遺跡である縄文遺跡とその文化に関してこの問題を考えるならば、アイヌ民族が縄文文化の継承者として位置付けることが可能であるとする学説が注目される (例えば尾本、1996 など)²⁰。

埴原ら (1982) は、縄文人とアイヌ民族とのつながりを形態学や遺伝学など様々な観点から分析・検証し、非常に高い近似性を見出した²¹。それ故、アイヌ民族の生活様式や精神世界に縄文時代の片鱗を垣間見ることができると主張する (埴原、2005)²²。

例えば、自分たちが育てた熊を屠殺し、その「霊を送る儀式」として知られている「イオマンテ」(図 2-10²³) には、自然の恵みに対



図 2-10 イオマンテにより「送られた熊」の頭骨 (苫小牧市博物館所蔵写真)

する感謝の念と熊の魂の再生を願う意味が込められている（例えば宇田川、1989）²⁴。

アイヌ民族はまた、動物のみならず、植物や自然現象、人間の作る道具など様々なものにも魂が宿っていると考え、そうした事物が人との関係において役割を終えた時には、感謝の意を込めて儀式を執り行った上で、焼却したり破棄したりしていた。

一方、縄文遺跡から発見される遺物のうち、土器や土偶などは、ほとんどの場合、全体あるいは一部が壊れたり欠けたりした状態で特定の場所に埋葬されており、完全な形で見つかることはない（図 2-11）²⁵。

それは、役割を終えた土器や何らかの願いが託された土偶を壊すことによって、そこに宿っていた魂をあゝの世へ送り返し、感謝の意を表すとともに、（土偶になぞらえた人の）魂の再生を願ったりしたものと解釈されている（例えば町田、2000）²⁶。



図 2-11 多くの土器が一か所に埋葬されている土器塚（北海道松前町の東山遺跡）

このような儀礼は「（モノ）送り」と称され、その儀礼がおこなわれる場所は「送り場」と呼ばれているが、一連の行為に象徴される思想や精神性は、まさに縄文人からアイヌ民族へと受け継がれてきたものではないか²⁷。

町田はまた、不要になったものを壊してから大地に帰すという思想あるいは習俗は、焼畑農業に起源を持つ宗教儀礼であるという学説がほぼ定着していると指摘する。

焼畑によって栽培される作物としては里芋（タロイモ）に代表されるイモ類があるが、その種芋を発芽させる際には、そのまま埋めるのではなく、幾つかにバラして埋める。バラされた種芋それぞれが芽を出して生育していくため、そのようなプロセスに着想を得て「モノ送り」という儀礼の際にも壊して埋めるという形式を用いるようになったのであろうという。

この説に従えば、先に述べた縄文時代に焼畑の手法が用いられたであろうことと、そうした手法により自然の恵みが得られ、それを繰り返す営みの中から「モノ送り」の思想が発生し、生命の再生を願う儀礼として発展し根付いていったことが結び付く。

宇田川によれば、狩猟によって捕獲した熊に対して送りの儀式をする事例は、ユーラシア大陸北部から北アメリカの先住民族にまで広く見られるが、育てた熊を殺し送る儀式、これを宇田川は「仔熊飼育型クマ送り」と呼んでいるが、この型の送りを行うのは特定地

域に住む少数民族に限られているという。

それは、樺太の 3 民族（樺太アイヌ、ニブヒ、ウィルタ）、アムール川流域の極東地域に住む 4 民族（ナナイ、ナーヌィ、ネギダル、ウリチ）、そして北海道アイヌである（図 2-12）。

先に挙げた焼畑の手法やイモ類の栽培は、今日でも東南アジアや南太平洋の島々で行われており、その意味で南方系の文化として理解されるが、他方、この熊の霊送りの儀礼は北方系の文化のようである。この辺りに、縄文人やアイヌ民族、そして日本人の成り立ちにまつわる複雑な物語が潜んでいる。

2008（平成 20）年 6 月、わが国ではアイヌ民族の先住権がようやく公に認められ、その文化に対する関心の高まりが感じられるところだが、アイヌ文化に関する理解を深めることは、このように縄文時

代から現代への時間的距離を縮め、一部とはいえ縄文文化の実像を実感させてくれる面がある。

同時に、モノを大切にすることや自然の恵みに感謝する気持ち、人間は自然に生かされているのだという事実を忘れてしまいがちな消費社会に生きる我々にも、縄文人の DNA が受け継がれていたことを気付かせ、自身のライフスタイルを見つめなおす契機を与えることになる。

（2）石に祈りを込める

秋田県鹿角市にある大湯環状列石、いわゆるストーンサークルと言われる遺構は、大小

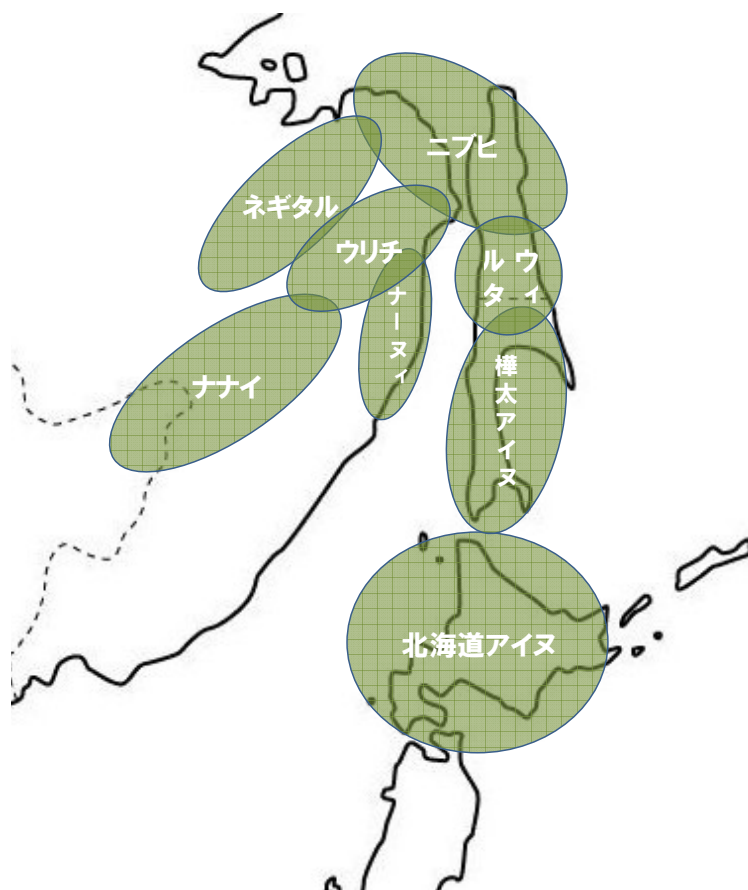


図 2-12 仔熊飼育型クマ送りのひろがり（宇田川, 1989 を参考に作図）

の石が直径 40mほどの円形に並んでいるもので、それらを詳しく見ると、いくつかの石を組み合わせて作られた小さな石組が円周上に配置され、全体として二重の環を構成している（図 2-13）²⁸。

さらに、その中には日時計のように組まれた石もあり、環の中では独立した位置に置かれている。縄文時代に作られたものがそのままの形で残っているという意味でも非常に貴重なものである（図 2-14）。

これらの石組の下から墓穴と思われる穴が発見されていることから、ストーンサークルは、基本的に墓石のようなものとして並べられたと考えられている。しかし、ストーンサークルの配置の仕方や遺構から発見された祭祀用と思われる様々な飾り物などから、この場所がまつりの場所として使われていた可能性も指摘されている²⁹。

いずれにせよ、石をモニュメントとして配置し、そこに死者を埋葬して祈りを込める、恐らくその祈りとは、魂の再生を願うものであったことが想像されるが、そのような形式が、縄文時代において成立していたことがわかる。

山形県の県南部、置賜地方には「草木塔」あるいは「草木供養塔」と刻まれた石碑が多数、存在している（図 2-15）³⁰。

「やまがた草木塔ネットワーク」（事務局：山形大学）の調査によれば、同様の石碑は



図 2-13 大湯環状列石（秋田県鹿角市）の万座環状列石（上）と野中堂環状列石（下）



図 2-14 日時計状石組遺構（秋田県鹿角市大湯地区：野中堂環状列石）

全国に 170 基ほど確認されており、そのうちの約 9 割が山形県内に集中している³¹。

現存する最古のものは、今から約 230 年前、江戸時代中期の安永 9 (1780) 年に米沢市大字入田沢字塩地平 (しおじだいら) に建立されたものであるという。当時、米沢藩の江戸屋敷が全焼し、その建て替えのための用材をこの地域から大量に伐採したことにより、山林が著しく破壊された。その状況を憂慮した当時の人々が建立したものと伝えられている。

人々を石碑の建立に向かわせた動機は、草木にもそれぞれ靈魂が宿り、その草木から得られる恩恵に感謝し、伐り倒した草木の魂を供養するという気持ちであると言われている。このような事例を見ると、まさに縄文の精神に相通じるものが受け継がれてきていることを感じさせる。

草木塔は、水質や土壌の汚染など環境問題が注目されるようになった今日、その建立の精神を理解した人々によって、環境問題を啓発する目的で建立されるようになっており、山形県外でも 22 基あることが確認されている。

類似の例として、食材として利用する魚介類に慰霊を感謝の念を込めて石造りの「塚」を建立するような地域も見受けられる。先に紹介した東京都・築地市場の波除 (なみよけ) 稲荷神社の境内には、様々な職業組合が自ら扱っている食材や料理を対象として「すし塚」、「海老塚」、「鮎鱈 (あんこう) 塚」、「活魚塚」、「卵塚」と刻銘された塚を建立し、命をいただいている魚介類等への感謝の意を表している。

また、裁縫に用いた縫い針を供養する「針塚」や包丁を供養する「包丁塚」などにおいても同様の意味が込められていることを見いだせる。

日本人は、このように人間以外の動植物やモノに対しても、その魂を慰霊し、その想いを石に込めて祈る気持ちを今日でも持っているが、その起源は、やはり縄文時代に見ることができると言える。

(3) 漆を使う伝統文化

磁器は英語で china と呼ばれるのに対し、漆器は japan と呼ばれる。欧米では、このように漆器を日本独特の技術、工芸品として捉えている。実際、北は青森県から南は沖縄県にいたるまで、日本各地に伝統工芸品として漆塗りの器や盆、容器、箸、櫛などが存在し、

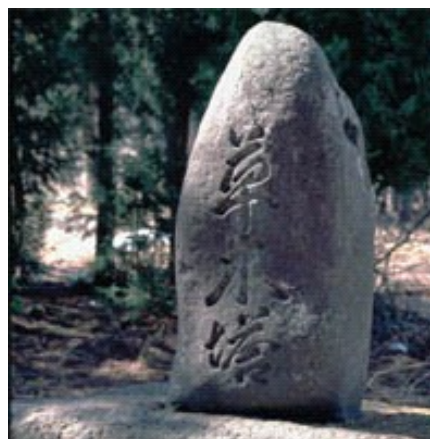


図 2-15 草木塔と刻まれた石碑 (山形県置賜地方)

全国にはおよそ 30 か所の漆器の産地がある。中でも、石川県の輪島塗、福島県の会津塗、和歌山県の紀州漆器（黒江塗）はわが国の三大産地³²として著名であり、北東北では青森県の津軽塗や秋田県の川連（かわつら）漆器・能代春慶（しゅんけい）、岩手県の浄法寺塗・秀衡（ひでひら）塗などが知られている（図 2-16）³³。



図 2-16 秋田県湯沢市稲川地区の伝統工芸品「川連塗」

このように日本の代表的伝統工芸品ともいえる漆器の起源は、実は縄文時代にまで遡ることができる。北海道函館市南茅部地区の垣ノ島B遺跡から出土した腕輪や髪飾りなどの漆製品は、年代測定の結果、約 9 千年前のものであることが確認され、現在のところ世界最古のものと言われている³⁴。それらの遺物は、あいにく 2002（平成 14）年に火災により焼失してしまい、現存する漆製品でわが国最古のものは石川県田鶴浜町の三引（みびき）遺跡から出土した約 6 千 8 百年前の漆塗りの櫛である（図 2-17）³⁵。



図 2-17 日本最古の漆塗りの櫛（三引遺跡出土：石川県田鶴浜町）

この櫛は結った髪に差す装飾用として作られたものと考えられ、16 本の櫛歯に横木を渡して植物繊維で撚り合わせ頭部を半円形にするなど、かなり精巧に作られている。またベンガラ（弁柄）とよばれる赤色顔料（酸化鉄の粉末）が含まれた漆を 4 層塗り重ねるなど高度な技術が駆使されているが、このような技術は、現在でも輪島塗の下地の処理などに用いられており、縄文時代の技がまさに現代にまで受け継がれている事例である。



図 2-18 漆塗りの櫛（カリンバ遺跡出土：恵庭市）

漆が施されたこうした遺物は全国各地の縄文遺跡から発掘されているが、中でも北海道恵庭市のカリンバ遺跡（縄文時代後期）では、土抗墓といわれる当時の墓穴から漆の施された髪飾りや首飾り、櫛

や腕輪など 120 点以上の漆製品が発見され、「縄文時代でもっとも豪華な墓」と呼ばれている（図 2-18）³⁶。

漆を使う技術は、このように縄文文化と現代とを直接的に結びつけるものとして注目され、その証拠となる遺跡・遺物は身近なところで発見され公開されているのであるが、その事実を知る機会は意外と少ないのではないか。

教育委員会主催による遺跡の発掘調査報告会などより、発掘成果が一般公開される機会が設けられるが、参加者は基本的に考古学分野に関心をもっている人々に限られてしまいがちである。

漆の食器などの伝統工芸品は、日本人の食生活の変化とともに次第に使われなくなってきている。しかし、この漆を使う技術が 9 千年前も前から受け継がれてきているという事実は、世界に対しても十分誇れることである。

今後、縄文文化が一層注目されていくことによって、このような知られざる面も広く認識され、伝統文化・伝統工芸品の価値が見直されることに繋がっていくことを期待したい。

【注】

- ¹ 田嶋ら（2008、本章注 5 の参考文献参照）によれば、縄文時代においてクリと同様、食糧として利用されていたトチの実は、トチ餅などの地域の伝統食として今日でも受け継がれてきている。トチの実を食糧としてきた地域は奥深い山村が多く、そのような地域では焼畑農業を営んでいたところも多く見うけられるという。一例として、山形県鶴岡市行沢（なめさわ）地区は、古くから森林資源に依存してきた地域であり、1950 年代までは全世帯がトチの実を利用し、林業により生計を維持していた。同地区には、現在も約 40 ヘクタールのトチ林（集落の共有林）があり、トチ餅が地域の特産品として製造され販売されている。
- ² 図 2-1 の画像は、岩手県一戸町ホームページの「御所野縄文公園」より転載〔御所野縄文博物館承認〕 <http://www.town.ichinohe.iwate.jp/goshono/>
- ³ 佐藤洋一郎（2005）：DNA 分析でよむクリ栽培の可能性、「縄文文化を掘る—三内丸山遺跡からの展開」、pp. 119-130
- ⁴ 図 2-2 の画像は、山形県鶴岡市ホームページの鶴岡市温海（あつみ）庁舎「温海カブの栽培方法」から転載〔鶴岡市温海庁舎産業課承認〕 <http://www.city.tsuruoka.lg.jp/atsumi/akakabu/saibai.html>
- ⁵ 田嶋謙三・神田エリ（2008）：「森と人間～生態系の森、民話の森」、pp. 117-150
- ⁶ 現在、わが国で焼畑農業が行われている地域は、山形県鶴岡市温海町一霞地区（新潟県境）、長野県栄村秋山郷地区（新潟県境）、石川県白山市下多原地区、宮崎県椎葉村などである。
- ⁷ 山田昌久（2004）：森を使う縄文人、「縄文人の世界—日本人の原像を求めて」、pp. 204-227
- ⁸ クリやコナラ、クヌギの木は、伐採された切り株から複数の木が再生する「萌芽再生」の能力を持っており、復元力は強いとされている。
- ⁹ 山田昌久（2001）：縄文人の村づくり～その植物と道具の駆使、「日本人はるかな旅 海が育てた森の王国」、pp. 159-174

- ¹⁰ 山田 (2004) によれば、竪穴住居のサイズ (広さ) や発見された多数の遺構の数から、縄文人は基本的に3世代が同居することは少なく、いわゆる核家族タイプが多数を占めていたと推測する。一つの家族は親と子を併せて3,4人程度で構成され、子供が成長し配偶者を見つけると、その家を出て新しい住居を造る。その結果、20~30年というサイクルで住居が建て替えられていたのであろうと推測している。
- ¹¹ 図2-5の画像は、北海道ホームページの道民活動文化振興課「北の縄文~縄文の生活文化」より転載 [函館市教育委員会承認] <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/sbs/joumon/>
- ¹² 大木昌 (2005) : 「関係性喪失の時代~壊れてゆく日本と世界」, pp. 44-58
- ¹³ 木村治美 (1997) : 心をこめて家族の時間, 「家族を考える」, pp. 161-220
- ¹⁴ 小林達雄 (1995) : 縄文時代の自然の社会化, 「縄文時代における自然の社会化」, pp. 73-81
- ¹⁵ 小林は引用文献の中では明確に記していないが、「ウチ」と「ソト」という概念において「家」という漢字が「ウチ」という読みを持つことを念頭に置いているものと考えられる。
- ¹⁶ 勅使河原彰 (1995) : ケとハレの社会交流, 「縄文人の時代」, pp. 179-206
- ¹⁷ 図2-7, 8は、北海道ホームページの道民活動文化振興課「北の縄文~縄文の生活文化」より転載 (本章注11に同じ) [図2-8の画像は函館市教育委員会承認]
- ¹⁸ 2008 (平成20) 年12月より、外国人観光客の見学マナーが悪化した (冷凍マグロなどの商品に直に触れてしまうなど) ことを理由に、一部立入禁止区域が設けられることとなった。
- ¹⁹ 西山徳明 (2001) : 自律的観光とヘリテージ・ツーリズム, 石森秀三・西山徳明編「国立民族学博物館調査報告21 ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究」, pp. 21-36.
- ²⁰ 尾本恵市 (1996) : 「日本人の起源」, pp. 128-179
- ²¹ 梅原猛・埴原和郎 (1982) : 「アイヌは原日本人か」, pp. 199-217
- ²² 梅原猛 (2005) : 縄文文化・縄文の心を語る, 「縄文ジャーナル 2005 夏 縄文人の心」, pp. 1-7
- ²³ 図2-10の画像は、苫小牧市博物館から提供を受けたもの。
- ²⁴ 宇田川洋 (1989) : 「イオマンテの考古学」, pp. 1-7 および pp. 20-21
- ²⁵ 図2-11の画像は、北海道ホームページの道民活動文化振興課「北の縄文~縄文の生活文化」より転載 (本章注11に同じ)
- ²⁶ 町田宗鳳 (2000) : 「縄文からアイヌへー感覚的叡智の系譜」, pp. 90-128
- ²⁷ 町田宗鳳 (2000) : 上掲書, pp. 129-130 / 今日でも、身近なところでは、人が使った道具などに感謝の意を捧げる儀礼として「針供養」や「箸供養」、「どんと焼き」などの行事が全国各地で行われている。
- ²⁸ 図2-13, 14の画像は、世界遺産暫定一覧表に係る提案書「ストーンサークル」(2006、秋田県・鹿角市・北秋田市) から転載
- ²⁹ 図2-13において、野中堂環状列石の中心と万座環状列石の中心とを結んだ線の延長線が北西の方向を指し、夏至の日の太陽が沈む方向とほぼ一致することが確認されている。
- ³⁰ 図2-15の画像は米沢市ホームページの「城下町ふらり歴史探訪」から転載 [米沢市承認] <http://www.city.yonezawa.yamagata.jp/kanko/rekishi/rekitan.html>
- ³¹ 土橋陸夫 (2006) : 「自然との共生 草木塔」編集の背景, 「環境保存 No. 9」, p. 47
- ³² 三大産地の中では輪島塗がもっとも古く、室町時代前期 (14世紀末~15世紀初め) 頃に現在と同様の技法で漆器が作られていたことが確認されている。次いで紀州漆器が室町時代後半の16世紀初めごろ、会津塗は安土・桃山時代が始まった16世紀後半頃から漆器の生産が始まっている。
- ³³ 図2-16の画像は、北東北三県観光立県推進協議会ホームページの「みちのく伝統工芸」より転載 [北東北三県観光立県推進協議会事務局 (H20年度HP担当: 岩手県) 承認] <http://myn.north-tohoku.gr.jp/kodawari/db02-m001-t015.php3>
- ³⁴ この垣ノ島B遺跡から出土した一連の漆製品は、2002 (平成14) 年12月、保管していた南茅部地区の事務所の火災によりそのほとんどが焼失してしまった。現存する世界最古の漆製品は、約7千年前のものとされる中国長江河口の河姆渡 (かぼと) 遺跡から発見された漆椀

である。

³⁵ 図 2-17 の画像は、石川県埋蔵文化財センターホームページの「いしかわ遺跡情報」より転載 [財団法人石川県埋蔵文化財センター承認]

<http://www.ishikawa-maibun.or.jp/iseki.html>

³⁶ 図 2-18 の画像は、北海道ホームページの道民活動文化振興課「北の縄文～縄文の生活文化」より転載 [恵庭市郷土資料館承認] (本章注 11 に同じ)

第3章 北海道・北東北の縄文遺跡群と世界遺産

前章までは、縄文時代の歴史的意義や縄文文化の今日的価値について論じてきた。本章では、そのような価値を内包する縄文遺跡を世界遺産へ登録しようとする四道県の取り組みを紹介しつつ、今後の展開における課題などについて論じる。

3-1 「北の縄文文化回廊」構想

(1) 「北の縄文」の発見

縄文時代の遺跡は今日でも国内各地で発見され発掘されており、その数はおよそ8万6千5百カ所とされている。このうち、北海道と青森県、岩手県、秋田県の北東北三県（以下「四道県」という。）のエリアには、全体の約23%に当たる約1万9千8百カ所が存在し、全国の中でも縄文遺跡が集中している地域である。

北海道中央部から南部にかけてと青森県の全域および岩手県と秋田県の北部にかかる一帯は、縄文時代前期の円筒式と呼ばれる土器や晩期の亀ヶ岡式と呼ばれる土器が共通して使用されていたことや、石鏃（せきじん）などに加工された黒曜石、



図3-1 縄文時代の時代区分ごとの土器文化圏

装飾品としてのヒスイなどの遺物が共通して数多く出土している（p. 18 図 2-7、図 3-1, 2）¹。

こうした考古学上の研究成果から、このエリアは津軽海峡を挟んでいるとはいえ、国内最大級の縄文遺跡集落とされる三内丸山遺跡を中心として、一つの文化圏を形成していたと考えられている。

2000（平成 12）年度、このエリアの遺跡群の活用可能性に着目し、国土交通省による「歴史的地域資源を活用した地域活性化調査—東北における歴史的地域資源を事例として—」が実施された。

この調査は、特に三内丸山遺跡における地域活性化の手法に焦点をあてた事例

調査研究であったが、翌 2001（平成 13）年度には、その調査結果を受けて、「縄文遺跡の連携による地域活性化手法に関する調査」が行われ、その中で、広域での遺跡活用のための実験的プロジェクトが提案された²。

そのプロジェクトとは、北東北三県が「縄文週間」と位置付ける特定の期間に、それぞれの県内でモデル的な縄文遺跡を会場として選定し、共通のテーマでイベントを同時開催するものであった（図 3-3）。

2002（平成 14）年 9 月、この提案は「縄文の心とまつり」をテーマとして掲げるイベントとして実現し、9 月 21 日から 23 日の 3 日間、三内丸山遺跡、大湯環状列石、御所野遺跡（岩手県一戸町）をそれぞれ会場に、フォーラムやコンサートなどが盛大に行われた³。



図 3-2 黒曜石の移動



図 3-3 「縄文週間」におけるイベントの告知ポスター

翌 2003（平成 15）年度には、函館市の大船遺跡を新たな会場として追加し、四道県の 4 遺跡による同時開催イベントとなり、名称も「縄文月間」と改称されて行われている。

こうしたイベント開催などを足掛かりにして、2003（平成 15）年 9 月に開催された北海道と北東北三県の知事による定期会合、いわゆる知事サミット（第 7 回）において、一連の取り組みが取り上げられ評価されることになった。四道県の知事は、これ以降、縄文遺跡群の活用について共同で取り組んでいくことに合意し、「北の縄文文化回廊」というコンセプトにより遺跡群の情報発信活動を展開していくことになる。

（２）アクションプログラムの展開

2004（平成 16）年 3 月、四道県は第 7 回知事サミットでの合意事項を受けて 4 カ年の「北の縄文文化回廊づくりアクションプログラム」を策定した。同年 4 月からは、縄文遺跡に関するフォーラムの開催や学術系の講演会、交流会議の開催などを実施していくこととなり、その事務局は四道県が持ち回りで担当した⁴。

アクションプログラムでは次に掲げる 4 つの「推進方策」が提示された。すなわち、

- ①「プログラム推進体制の整備」
- ②「普及啓発」
- ③「人づくり・地域づくり」
- ④「観光資源としての活用検討・促進」

である。なお、この段階では、世界遺産への登録については、⑤「その他」として補足的に挙げられるにとどまっている。①から④に関する具体的事業についてまとめたものが、表 3-1 である。

これらの方針と事業内容を掲げてスタートしたアクションプログラムは、2007（平成 19）年度で一応終了し、2008（平成 20）年 3 月に実施報告書がとりまとめられている⁵。その内容を整理したものが表 3-2 である。

報告書では、主に推進方策の②-a)に対応する「縄文文化フォーラム」と「北の縄文文化回廊展」の実施概要や、③-a)に対応する「北の縄文文化学交流会議」（以下「交流会議」という。）での協議内容が取り上げられ、総括されている。この中で注目すべき点を二つほど指摘したい。

一つは「交流会議」の役割である。「交流会議」は、もともと方針③「人づくり・地域づくり」のための意見交換・情報交換を行う場として位置づけられていた。しかし、報告書の内容を見ると、事業をすすめていく過程で「北の縄文文化回廊づくり」という、本来

表 3-1 アクションプログラムにおける推進方策

方針	事業内容
① プログラム推進体制の整備	a) 「北の縄文文化回廊づくり」推進協議会*（仮称）の設置 *四道県の民間団体、有識者、行政などで組織する事業推進のための中核的団体
② 普及啓発	a) 縄文文化フォーラム等*の開催 *縄文文化フォーラムや縄文文化展などの開催 b) ホームページ等による情報発信 c) 普及啓発用パンフレット等作成
③ 人づくり・地域づくり	a) 北の縄文文化学交流会議*の開催 *四道県の民間団体代表者、博物館等の専門職員、学識経験者等による情報交換、意見交換の場 b) 生涯学習活動等の促進 c) NPO など民間活動の促進
④ 観光資源としての活用検討・促進	a) 観光プロモーション等の促進 b) 受け入れ体制*の整備促進 *ボランティア・ガイドの育成促進など

この活動の本体となるべき組織、すなわち「（仮称）北の縄文文化回廊づくり推進協議会」の設置についての議論を行う場にも実質的になっていった。

この「交流会議」での4カ年にわたる議論の結果、2008（平成20）年2月に協議会立ち上げのための「発起人準備会」が開催され、同年9月、縄文遺跡の保存・活用にかかる活動を各道県で展開しているボランティア団体やNPO法人ら計18団体が正会員となり正式に発足した。事務局はNPO法人「三内丸山縄文発信の会」（青森市）に置かれている。今後は、具体的な活動案の策定とその予算・資金等をどう確保するかということが課題となろう。

もう一つは、推進方策の柱の一つとして掲げられていた④「観光資源としての活用検討・促進」に関して、報告書上全く記載がなく明確に総括されていないことである。確かに、4カ年の様々な取り組みの中で、各遺跡や展示施設を中心にしたフォーラムなどのイベントは賑やかに行われ、多数の来場者を集めたものも見受けられるが、それらのイベントは、やはり一過性の出来事である。

表 3-2 アクションプログラムの実施結果

事務局 内容	2004 (H16) 年	2005 (H17) 年	2006 (H18) 年	2007 (H19) 年
	北海道	青森県	秋田県	岩手県
「北の縄文文化 フォーラム」 : 講演, 発掘調査 報告, パネル等 ②-a) に対応	10/9 札幌市 参加者 230 名	8/20 青森市 参加者 80 名	9/23 秋田市 (参加者不明) 10/15 北秋田市 (参加者不明)	9/16 一戸町 参加者 350 名
「北の縄文文化 回廊展」 : パネル資料や出 土品等の展示 ②-a) に対応	1/18-25 函館市 来場者 2, 232 名	7/23-8/31 青森市 来場者 84, 260 名	9/21-25 秋田市 9/29-10/4 横手市 10/7-15 北秋田市 (各来場者不明)	7/14-8/26 盛岡市 来場者 7, 117 名 9/5-30 一戸町 来場者 1, 854 名
「北の縄文文化 学交流会議」 : 事例発表・意見 交換など ③-a) に対応	9/4-5 伊達市 委員 12 名 傍聴者 100 名 1/22-23 函館市 委員 10 名 傍聴者 25 名	8/21 青森市 委員 16 名 (傍聴者不明)	9/23-24 秋田市 委員 16 名 (傍聴者不明)	9/16-17 一戸町 委員 18 名 (傍聴者不明)
担当者会議	2 回 (7/2, 10/8)	なし (電話, 電子メー ルによる)	4 回 (4/26, 8/3, 9/24 , 1/16)	3 回 (8/7, 10/12, 2/20)

注) 各項目は、基本的に開催期日(期間)、開催場所、参加者等の順で記載している

前章で述べたような縄文文化の価値をより多くの人々に広く知ってもらうためには、一度訪れた見学者が再び来訪してくれるような形、あるいはそのような人々が他の新たな見学者を伴ってやってきてくれるような形が理想的である。

このようなりピーターを確保する上でも、観光資源としての縄文遺跡の活用という観点は重要であるはずだが、その議論や検討、具体的な取り組みが、このアクションプランの期間において実施された形跡は確認できなかった。

さらに、補足的なことではあるが、四道県の連携による取り組み、あるいは関係部局の連携による組織横断的な取り組みについても、その枠組みは必ずしも理念どおりに機能していたとは言えない。

例えば、アクションプログラムの実施にあたっては、学術的側面のみならず教育や環境、観光分野においても連携が必要となることが予想され、当初、準備段階の事務局には、四道県とも知事部局（企画・政策担当部課）の職員も参加していた。

しかし、実際に事業が始まった 2004（平成 16）年度からは、北海道を除く北東北三県では、基本的に埋蔵文化財保護業務などに携わる各県教育庁所管課職員が事業を担当することとなり、関連部局との連携は実現しなかった。

先に触れたように、アクションプログラムの実施期間においては、実質的に「交流会議」が中心的な役割を担い、その構成メンバーは学識経験者や博物館の専門職員、各遺跡の支援（ボランティア）団体等の代表者であった。活動目標の一つに世界遺産登録を目指すことが加えられたことも相まって、図らずも考古学や歴史学など学術的側面からのアプローチや活動内容に傾斜していったのもやむを得ない流れであったと言えよう。

いずれにしても、アクションプログラムによって世界遺産登録への取り組みは着実に前進したと言えるが、以上のような事情から「観光」という観点での議論や試みが取り残されたことは否めない。

3-2 世界遺産登録への動き

（1）単独提案と再提案

アクションプログラムにおいて、世界遺産への登録に関しては、当初、あまり明確には位置付けられていなかったことは先に指摘した通りである。

この動きが具体的に見えだしたのが、2005（平成 17）年 1 月に開催された第 2 回「交流会議」の場であった。委員から「活動目標の一つとして据えるべきではないか」との意見が出されたとの記録があり、これ以降、世界遺産登録を意識した作業が本格的に動きだしたことが確認できる。

この方針は、基本的に四道県の連携によって進められるものと思われたが、アクションプログラムの 3 年目にあたる 2006（平成 18）年 11 月、青森県は関係市町村と共同で県内 7 史跡を「青森県の縄文遺跡群」としてとりまとめ、世界遺産暫定リスト登録のための提案書を独自に文化庁へ提案した。これに対し、秋田県も鹿角市と北秋田市にある環状配石

遺構を特徴とする二つの遺跡を「ストーンサークル」というコンセプトでまとめ、単独で提案した⁶。

こうした動きは、四道県連携の足並みの乱れであるように見受けられる。しかし、一方では、四道県の縄文遺跡群をどの範囲まで組み込むかという議論で調整がつかないまま時間が経過するよりは、個別提案・登録であれ、世界遺産に値するだけの遺跡が含まれることになれば、「北の縄文文化回廊づくり」の取り組みに弾みがつくとの思惑もあり、そのような狙いも念頭に単独提案に踏み切ったものと推測される。

2007（平成 19 年）年 1 月、これらの提案は文化庁での審査の結果、継続審議とされ、その指摘を受けて、青森、秋田の両県は、特に資産構成において、より広範囲の遺跡を含めて組み直す必要に迫られることになった⁷。

両県は、隣接する岩手県北部や北海道南部も視野に入れた枠組みを再度検討し、同年 3 月、青森県の呼びかけに応じる形で北海道と岩手県が賛同すると、最終的には四道県と関係 12 市町村による共同提案として、国内暫定リスト登録へ向けた追加提案を行うに至った（2007 年 12 月に提案書を再提出）（図 3-4）⁸。

この提案書に含まれる縄文時代の遺跡は全部で 15 か所あり、それぞれの遺跡の概要をまとめると、表 3-3 のようになる。

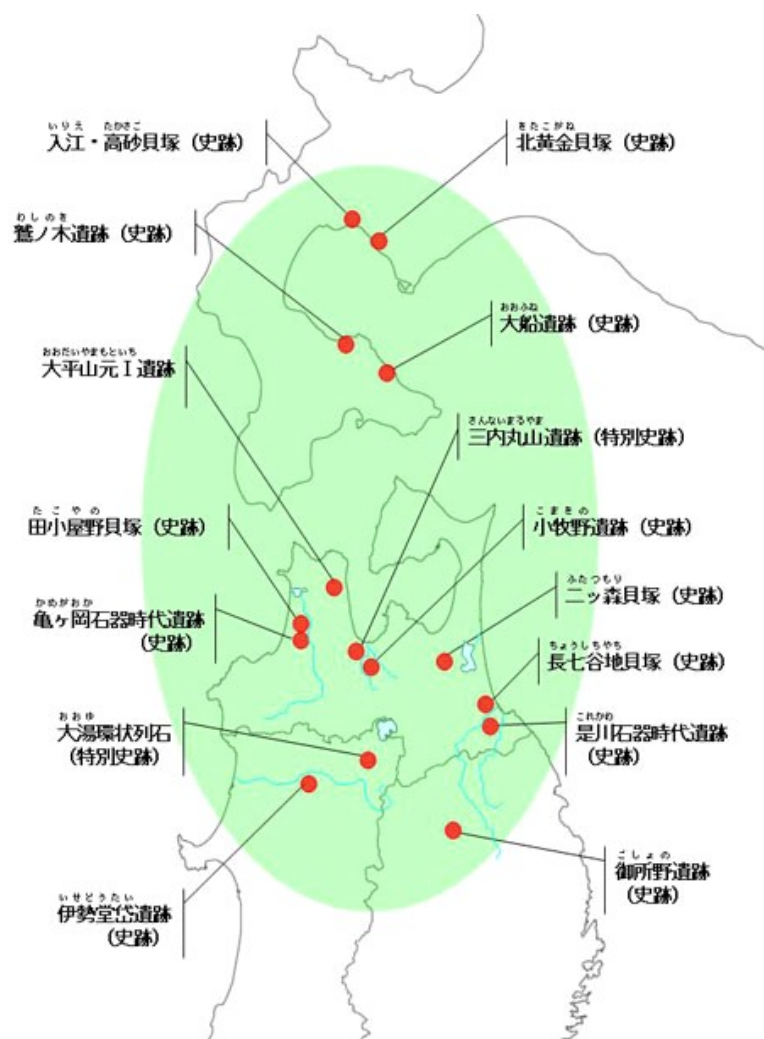


図 3-4 世界遺産登録のための提案書に記載された北海道・北東北における 15 か所の縄文遺跡群

表 3-3 北海道・北東北の縄文遺跡群

	名称 (年代区分)	所在地	遺跡の主な特徴 【立地条件】
1	きたこがね 北黄金貝塚 (前期) 7千年～5千5百年前	北海道 伊達市	大規模な貝塚を中心とする集落遺跡。埋葬人骨や動物遺体が出土。 【舌状丘陵上】
2	いりえ たかさご 入江・高砂貝塚 (前期～後期)	北海道 洞爺湖町	大規模な貝塚や土抗墓を伴う集落遺跡。埋葬人骨や副葬品が出土。 【海岸段丘上】
3	わしのき 鷲ノ木遺跡 (後期) 4千年前	北海道 森町	北海道内最大規模の環状列石と竪穴墓域。大小11基の土抗墓。 【舌状丘陵上】
4	おおふね 大船遺跡 (中期) 5千年～4千年前	北海道 函館市	深さ2mを超える竪穴住居が特徴。100棟以上の住居跡や盛土遺構、土坑群。 【海岸段丘上】
5	さんないまるやま 三内丸山遺跡 (前期～中期) 5千8百年～4千年前	青森県 青森市	約1千5百年間継続した大規模集落遺跡。大型竪穴住居、大型掘立柱建物など。 【丘陵上】
6	こまきの 小牧野遺跡 (後期) 4千年前	青森県 青森市	土地造成と特異な配石による環状列石は三重の環から構成される。 【丘陵上】
7	これかわ 是川石器時代遺跡 (晩期) 3千年前	青森県 八戸市	3つの遺跡から成る。円筒式土器や赤漆塗の木製品類、クルミなどが出土。 【河岸段丘上】
8	ちょうしちやち 長七谷地貝塚 (早期)	青森県 八戸市	東北地方では数少ない早期の貝塚。漁労文化の発達を示す遺物多数。 【低位段丘先端部】

9	かめがおか 亀ヶ岡石器時代遺跡 (晩期) 3千年前	青森県 つがる市	遮光器土偶の名称で知られる大型土偶が出土。3地区から成る。 【河岸段丘および低地部】
10	たごやの 田小屋野貝塚 (前期)	青森県 つがる市	日本海側では数少ない前期の貝塚。ベンケイ貝による貝輪の製作が行われた。 【低丘陵部】
11	につもり 二ツ森貝塚 (前期～中期) 5千5百年～4千年前	青森県 七戸町	東北地方では有数の大規模な貝塚を伴う集落跡。東西2カ所に形成。 【小川原湖西岸】
12	おおだいやまもといち 大平山元Ⅰ遺跡 (草創期) 1万6千年～1万3千年前	青森県 外ヶ浜町	旧石器時代から縄文時代への移行期にあたる遺跡。日本最古の土器が出土。 【河岸段丘上】
13	ごしょの 御所野遺跡 (中期) 4千5百年～4千年前	岩手県 一戸町	中央部に配石遺構を伴う大規模集落遺跡。竪穴住居の焼失跡が多数存在。 【河岸段丘上】
14	おおゆかんじょうれつせき 大湯環状列石 (後期) 4千～3千5百年前	秋田県 鹿角市	直径45m以上の二つの環状列石を主体とする大規模記念物。 【舌状台地上】
15	いせどうたい 伊勢堂岱遺跡 (後期) 4千年前	秋田県 北秋田市	直径30m以上の4つの環状列石からなる配石遺構。土抗墓、溝状遺構あり。 【河岸台地上】

一連の経緯を概観すれば、縄文時代において一体的な文化圏を形成していた「北の縄文」エリアを、今日の行政境界の存在故に区分けして提示しようとした試みには、やはり無理があったということになる。換言すれば、「北の縄文」に着目したことにより、四道県の広域連携の枠組みは必然的に形成されなければならなかったと言える。

その意味では、「北の縄文文化回廊」というコンセプトは、文化遺産をどう捉えるかという領域の議論にとどまらず、地方分権の推進と道州制への移行などに関わる今日的課題への議論などにも影響を与える可能性があると言える。

(2) 暫定一覧表への記載と課題

2008（平成20）年9月26日、文化庁文化審議会文化財分科会の世界文化遺産特別委員会は、前年度に応募のあった提案32件について調査・審議を行った結果、「北海道・北東北の縄文遺跡群」を含む5件の提案が「世界遺産暫定一覧表記載文化資産」として適当であると発表した⁹。

ただし、世界文化遺産特別委員会は、現状のままでは「世界遺産にふさわしい文化資産として国際的な評価を得るには不十分」であるとし、「相当程度の見直しが必要」と条件を付した。

具体的には、「縄文時代の文化、生活や社会を説明する上で極めて重要かつ不可欠であるが、提案には十分に反映されていない遺跡」を構成資産として付け加えるよう求めている¹⁰。その検討作業は、今後、文化庁が中心となって進めていくことになっているが、これに伴い、「主題や構成資産にふさわしい名称」への変更が必要とされ、「北海道・北東北などの縄文遺跡群」という名称設定のもとで、主に「東日本の落葉広葉樹林が広く展開する地域に分布する縄文遺跡」を加える方向で検討されることとなった¹¹。

同年12月15日、外務省、文化庁、環境省、林野庁、水産庁、国土交通省から構成される世界遺産条約関係省庁連絡会議が開催され、「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」という名称に変更され、他の2件と共に一覧表への追加記載について正式に了承された¹²。

一方、四道県では、暫定リスト入りが発表された直後の10月上旬に、文化庁において上述の検討事項についての確認を行い、11月には四道県の担当課長会議を開催して今後の推進体制などについて話しあっている。

世界遺産登録へ向けた最大の作業は「推薦書」の作成であり、そのための組織体制として、2009（平成21）年度から3つの組織を設けて作業を進めていくことが決められた。その構成は図3-5のとおりである。

特に「縄文遺跡群世界遺産登録推進会議」と命名された関係自治体による組織は、推薦書案の作成が最大の使命であり、道や県の埋蔵文化財保護業務を所管する部課職員によって構成され、基本的に知事部局の企画・調整部門や観光部門の職員は含まれていない。

ここで懸念されるのは、先に指摘したアクションプログラムの場合と同様、今後の対応が学術分野の専門家集団が中心となって進められていくことである。世界遺産への登録に向けては、学術的・教育的分野における視点やアプローチは当然ながら重要であり大切な

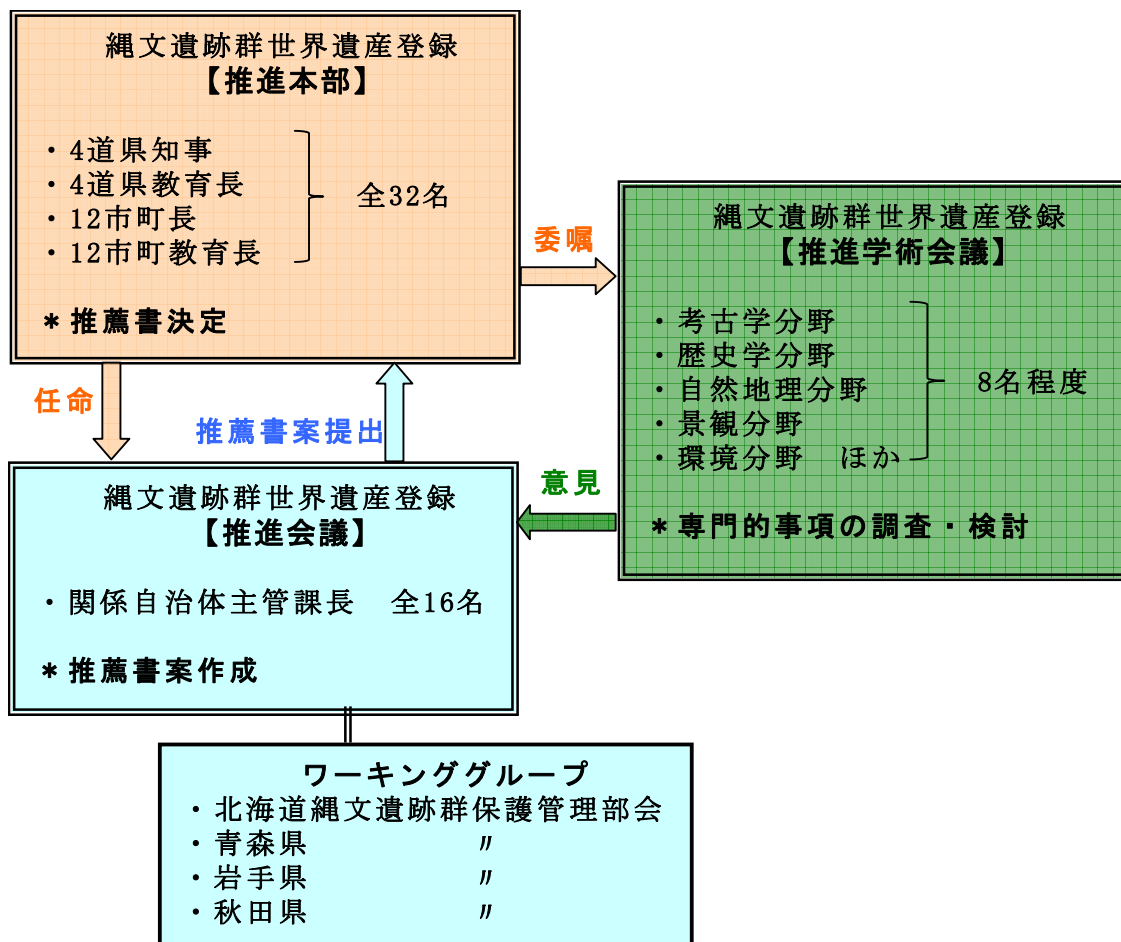


図 3-5 四道県による世界遺産登録に向けた推進体制（案）
（秋田県教育庁提供資料に基づき筆者作図）

作業ではあるが、対外的に縄文遺跡群の価値を広く分かりやすく伝えるにはどうすればよいのか、そのための手法として観光をどう位置付け取り組んでいくべきかという議論も同時に進めていく必要がある。

しかし、現在の組織構成では、アクションプログラムの実施期間においてほとんどこの議論がなされなかった経緯からしても、観光という視点での議論が行われることはあまり期待できない。また、四道県の観光部局からも、青森県を除いては、そのようなビジョンが現在のところ窺われない。

青森県では、今年度の縄文遺跡関連事業として文化財保護課が総額 6 千 2 百万円を予算化し「あおもり JOMON プロモーション事業」として各種 PR 事業を展開している。

これと連動して、知事部局の企画政策部では、県ホームページを活用した情



図 3-6 青森県が作成した縄文遺跡プロモーション用ロゴマーク

報発信事業や、縄文遺跡群を活用して地域活性化に取り組む各種団体の活動に助成する「縄文遺跡活用地域活性化推進事業」（予算額 3 百万円）を実施するなど、有効な部局間連携が図られている（図 3-6）¹³。

青森市の昭和通り商店街では、三内丸山遺跡から出土した板状土偶をモチーフとした図柄のスタンプ（シール）を作成し、商店街加盟店での買い物百円につき 1 枚を買い物客に配布している。このスタンプ 3 百枚を集め台紙に貼って提示すると、3 百円相当の金券として利用することができるようになっていいる。金券扱いのため、指定金融機関で預金することもできる（図 3-7）。



図 3-7 青森市昭和通り商店街に掲示されている案内板（右）と縄文スタンプ（左）

北海道では、2007（平成 19）年 12 月、縄文遺跡の魅力国内外に情報発信する目的で、各界有志による任意団体「北の縄文文化を発信する会」が設立された。この会では、2008（平成 20）年 7 月、北海道洞爺湖町で開催された主要国サミットに合わせ、北海道における縄文遺跡の紹介を中心に縄文文化の価値を伝えるホームページを作成し、日本語と英語により情報発信を行っている（図 3-8）¹⁴。

四道県は、こうした民間団体などの動きにも注目し、それらを巻き込みながら、行政と民間が連携する効果的な活動や対応を行っていく視点を持つ必要があろう。

繰り返しになるが、学術的なフォーラムの開催やイベントの実施は、考古遺跡に関心のある特定の人々を中心に、一時的に注目を集めることは可能である。しかし、縄文遺跡・縄文文化に対する興味や関心をより多くの人々にもつ



図 3-8 北海道で開設された「北縄文文化を発信する会」ホームページ

てもらい、何度も遺跡に足を運んでもらうためには、観光資源としての位置づけも明確にしながら活用の仕方を検討し工夫していくことが肝心である。

世界遺産登録のための推薦書作成には今後少なくとも4年は必要とされており、文化庁からユネスコへと推薦されるのは、今のところ早くとも2013（平成25）年度になる見込みである。この間、四道県の観光関連事業を所管する部門は、連携と協働により、この観光資源を活用する具体的な準備に取り組んでいくべきである。その実施主体や枠組みなどについては、次章で触れる。

【注】

- ¹ 図3-1, 2は「北の縄文文化回廊づくりアクションプログラム」（2004）pp. 3-4より転載（本章注4の参考文献参照）。
- ² 国土交通省（2002）：縄文遺跡の連携による地域活性化手法に関する調査，p. 1
- ³ 国土交通省（2005）：「北東北のグランドデザイン」に関する地域の自立・経済の活性化方策調査報告書，p. 136／図3-3は同報告書の同頁より転載。
- ⁴ 北の縄文文化回廊づくり実践プログラム検討チーム（2004）：「北の縄文文化回廊づくりアクションプログラム」
- ⁵ 北海道・青森県・岩手県・秋田県（2008）：「北の縄文文化回廊づくり事業実績報告書」，p. 3
- ⁶ 青森県・青森市・八戸市・つがる市・七戸町（2006）世界遺産暫定一覧表に係る提案書「青森県の縄文遺跡群」／秋田県・鹿角市・北秋田市（2006）世界遺産暫定一覧表に係る提案書「ストーンサークル」
- ⁷ 文化庁（2007）：（別紙5）継続審議とすることが適当とされた文化資産，「世界文化遺産特別委員会における調査・審議の結果について（平成19年1月23日付）」
- ⁸ 北海道・函館市・伊達市・森町・洞爺湖町・青森県・青森市・八戸市・つがる市・外ヶ浜町・七戸町・岩手県・一戸町・秋田県・鹿角市・北秋田市（2007）世界遺産暫定一覧表追加資産に係る提案書「北海道・北東北の縄文遺跡群」／図3-4は、同提案書p. 6より転載。
- ⁹ 文化庁（2008）：（別紙7）世界遺産暫定一覧表記載文化資産，「我が国の世界遺産暫定一覧表への文化資産の追加記載に係る調査・審議の結果について（平成20年9月26日付）」，／選出された他の4件は次の通り：「金と銀の島、佐渡一高山とその文化」（新潟県佐渡市）、「九州・山口の近代化産業遺産群－非西洋世界における近代化の先駆け」（福岡県北九州市・大牟田市・飯塚市・田川市、佐賀県唐津市、長崎県長崎市、熊本県荒尾市・宇城市、鹿児島県鹿児島市、山口県下関市・萩市）、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」（福岡県宗像市・福津市）、「百舌鳥・古市古墳群－仁徳陵古墳をはじめとする巨大古墳群」（大阪府堺市・藤井寺市・羽曳野市）
- ¹⁰ 具体的には、「道具の石材原産地遺跡や生産遺跡など」が挙げられているが、これに該当する可能性があるのは、黒曜石の原産地として知られる「白滝遺跡群」（北海道遠軽町：国指定史跡）や「鷹山遺跡群」（長野県長和町）などであろう。
- ¹¹ 今年度の世界文化遺産特別委員会報告書の「別紙8」には、今回、登録が見送られた文化資産がすべて掲載されているが、そのうち、宮城県から提案のあった「松島一貝塚群に見る縄文の原風景」（宮城県塩竈市・東松島市・松島町・七ヶ浜町・利府町）の資産の一部について、「北海道・北東北の縄文遺跡群」への選択的統合が必要となる可能性を指摘されている。
- ¹² 文化庁文化財部記念物課（2008）：（報道発表資料）「我が国の世界遺産暫定一覧表への文化

資産の追加記載について(平成20年12月15日付)」／選出された他の2件は次の通り:「九州・山口の近代化産業遺産群－非西洋世界における近代化の先駆け」(福岡県北九州市・大牟田市・飯塚市・田川市、佐賀県唐津市、長崎県長崎市、熊本県荒尾市・宇城市、鹿児島県鹿児島市、山口県下関市・萩市)、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」(福岡県宗像市・福津市)

¹³ 図3-6の画像は、青森県ホームページの「縄文ファン」のページより転載[青森県企画政策部政策調整課承認] <http://www.net.pref.aomori.jp/jomonfan-aomori/>

¹⁴ 図3-8の画像は、「北の縄文文化を発信する会」ホームページのトップページを転載 <http://www.jomon-heritage.org/>

第4章 観光創造としての「北の縄文」と地域活性化

4-1 ライフスタイル・イノベーションと新しい観光のかたち

澤村（2006）は、三内丸山遺跡と御所野遺跡を訪れた見学者を対象にアンケート調査を行い、消費金額や宿泊傾向、来訪の動機、再見学の意向などについてデータを収集し、遺跡観光による経済効果を調査・分析している¹。その結果は以下の3点に要約される。

- ① 三内丸山遺跡と御所野遺跡は共に東北地方に位置しているが、特別史跡として知名度の高い三内丸山遺跡は全国各地から観光客を呼び込んでいる「全国区型」であるのに対し、御所野遺跡は、来訪者のほとんどが地元住民の「地域密着型」である。また、全国にある遺跡（公園）の大半が、この「地域密着型」である
- ② 三内丸山遺跡は遺跡整備に要した投資額を大きく上回る経済効果を上げているが、御所野遺跡ではその効果が小さい。従って、経済波及効果という指標だけでは、遺跡整備の意義や影響を測ることは困難である。
- ③ 三内丸山遺跡のような知名度の高い遺跡であっても、単なるイベントの開催だけでは観光客の増加を図れない。自治体挙げての連続イベントの開催など、話題性のある出来事を定期的に行わなければ、今後も集客数の伸びはあまり期待できない。

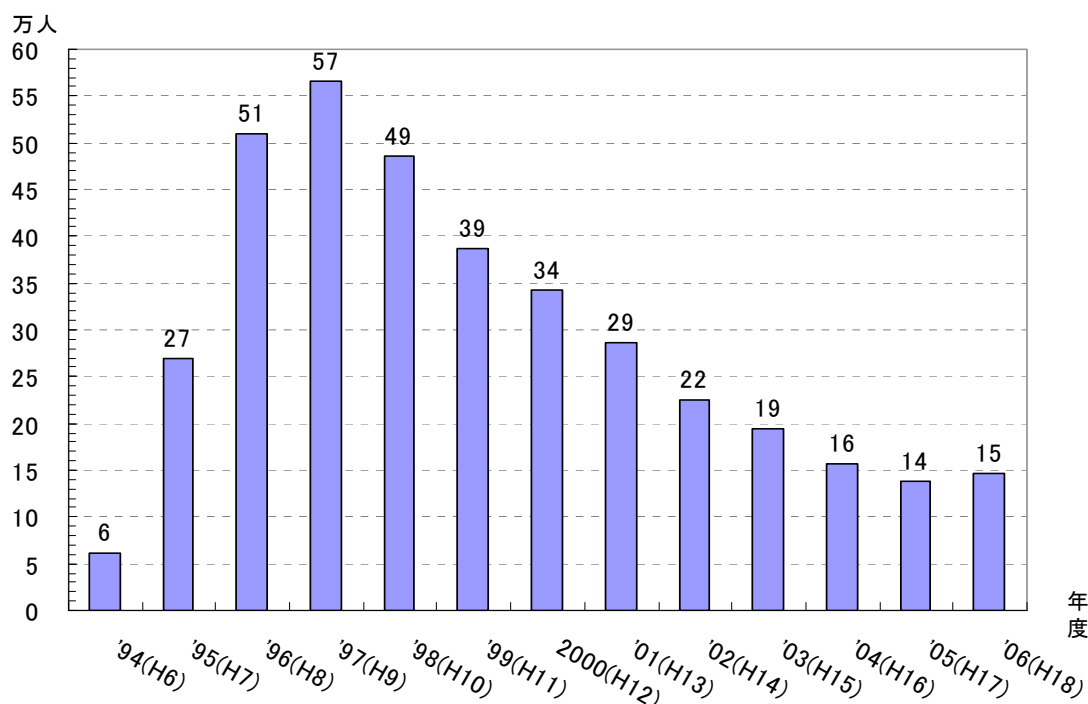


図 4-1 三内丸山遺跡における展示室への入場者数の推移

前章において、北東北三県や北海道が連携し、2002（平成14）年度から2003（平成15）年度にかけて「縄文週間（縄文月間）」というイベントが開催されたことを取り上げたが、図4-1のとおり、この間の三内丸山遺跡における展示室への年間入場者数は、約22万人から19万人へと減少しており、澤村の指摘したように、復元建物の整備やイベントの開催などで見学者数を増やそうとしても、その効果は限定的であることがわかる²。

考古遺跡、特に縄文時代の遺跡の現場を訪れると、よく目にするのは、いわゆる「竪穴住居跡」と呼ばれる当時の建築物等の痕跡である。縄文時代の遺跡をはじめ、日本の歴史的建造物の多くは木造であるため、建立当時の建物が現存しているケースはほとんど無いに等しい。また、埋蔵文化財として保護・保存するため、遺構の大部分は土で覆われてしまい、直接見るができない。

他方、考古遺跡として世界的に著名なエジプトのピラミッドやカンボジアのアンコールワット遺跡群のように巨大な石造建築物が現存し目の前で見える場合は、それだけで遺跡としての存在感が容易に実感でき分かり易いと言える。従って、三内丸山遺跡の場合も、復元された掘立柱建物や竪穴住居が巨大であったことが大きな特徴となり、その存在感や新規性によって訪れる人の目を引き関心を集めてきたと言える。

しかし、考古遺跡を含む、いわゆる文化遺産と言われるものを対象とする観光、すなわちヘリテージツーリズムにおいては、山村（2006）が指摘するように、「メディアとしての文化遺産を通して先人と向き合い、そこから先人が残したメッセージを読み解くこと」が大事である³。換言すれば、まずはメディアとしての縄文遺跡の価値を明確にし、それを見学者に対して如何に解りやすく、かつ魅力的に伝え、理解してもらうかということに取り組むことが重要である。

例えば、竪穴住居跡や復元された竪穴住居を見学しても、従来の見学者の理解は、かつてそのような様式の建物がそこにあったというレベルに留まっていたであろう。しかし、第2章で指摘したように、家屋を建て一つ屋根の下で家族が暮らすようになったことで「ウチ」と「ソト」の概念が意識化され、親子の情愛や家族の絆を強める作用をもたらしたという意義を発見することで、遺跡が新たな意味を有して見えてくる。今日、家族と目を合わせることも団欒を過ごすこともないほど多忙な生活を送っている人々が、遺跡を訪れ、その発するメッセージを受け止めて自身のライフスタイルを見つめ直すような契機を得ることになれば、そこに縄文遺跡観光の新しいあり方が生起する。

もう一つ、縄文遺跡の立地環境も注目される。第3章の表3-3に示したように、遺跡の

多くが丘陵や段丘といった見晴らしの良い所に位置している。実際に現地を訪れてみると、市街地から離れた場所にあることを除けば、現代でも住環境としては非常に豊かで快適な場所に感じられる。周囲には、必ず小川が流れており、縄文人が水の確保や川魚などの捕獲にも利便性の高い場所を選んでいたのであろうことが推察される。

そのような場所、特に現在、遺跡公園として整備されている場所においては、小林の指摘するような「ハラ（原）」が眼前に広がり、広大な「ソラ（空）」を背景に落葉広葉樹の森やシンボリックな「ヤマ（山）」を望む、美しい景観や空間が存在している（図4-2）⁴。



図4-2 遺跡公園として整備されている御所野遺跡の風景

都会や集合住宅などコンクリートに囲まれた人工的な環境で暮らしている人々が、縄文遺跡を訪れ、その空間の持つ心地よさや豊かさを体感しながら、そこに集う人々同士や周辺に住まう人々との交流やコミュニケーションを深め、心身ともにリフレッシュすることができれば、縄文遺跡はそのような充実感や幸福感を得られる憩いや癒しの「場」として再定義される。

このように捉えると、縄文遺跡は、単にそこに「有る」ものとして提示され、そういうモノとして見るだけではなく、現代的ベクトルにおいて意味を有する物語性と共に、創造的に訪問者に示される必要があるだろう。それは石森（2008）が指摘するところの、視覚重視の従来型の「観光」から、五感を通じて突き動かされ感動を伴うような「感幸」の在り方そのものである⁵。さらに言えば、縄文遺跡は、その場を訪問した人にとって、何かしら生きざまの変容、すなわち暮らしの形の変化をもたらすような可能性も有している。

繰り返せば、縄文遺跡には、そうした「ライフスタイル・イノベーション⁶」を伴うような新しい観光のかたちが求められており、かつその可能性を十分に秘めていると言える。

4-2 遺跡の活用と行政の役割

（1）遺跡ガイドの役割と自律的観光

先に例を挙げた三内丸山遺跡の復元された大型掘立柱建物については、その復元作業にあたって単に6本の柱だけが立っていたのか、あるいは建築物として屋根や床、壁などが

組まれていたのか、ということなどがかなり論議的となり、結局、見張り櫓のような、ある種中途半端な形となった（図 4-3）⁷。

前者の説を主張した人々は、アメリカ北西海岸地域の先住民である、ハイダ、ヌートカ、トリンギット、ツィムシアンなどが作るトーテムポールを意識していた（例えば、小山（2002）など）⁸。カナダのクイーン・シャーロット群島にあるニンスティンツ遺跡には、数百年前に建てられたトーテムポールが現存しており、1981 年、世界文化遺産に登録されている。縄文時代、あるいはそれ以降の時代において、「北の縄文」は北米大陸の民族文化との関連があったことが推察される。



図 4-3 三内丸山遺跡の復元された大型掘立柱建物

また、この 6 本の柱は、いずれも 4m20cm という間隔で建てられており、3 本を一組として 2 列に並べられたと考えられている。その並んでいる方角は、冬至の日の出、日の入りの方角とほぼ一致するように配置されている。

夏至や冬至など特定の日時に太陽の動きに関連して特別な現象が観察されるのは、世界遺産の中にもいくつか見受けられる。ストーンヘンジ（イギリス）やボイン渓谷の考古遺跡群（アイルランド）、テオティワカンの古代都市（メキシコ）などがその例であり、縄文文化は世界の古代文明における世界観、宇宙観と共通の特徴を備えているのである⁹。

しかし、現在の各縄文遺跡における展示（ガイダンス）施設を見ると、このような事実が必ずしも十分に表記され解説されているとは言えない。ここに遺跡ガイド（インタープリタ）の役割の重要性がある。

遺跡公園などとして整備されている縄文遺跡を訪れると、かつて当該遺跡の発掘調査員として現場に携わった地域住民などが中心にボランティアで遺跡を案内している（図 4-4）。ガイドを引き受けている人は、遺跡に関する基本的知識を有しているが、人によってその内容に深淺があることが感



図 4-4 冬期間も活躍する三内丸山遺跡のボランティアガイド

じられる。

また、遺跡ガイドを希望する新規の参加者が少なく、結果としてガイドの高齢化が進んでいることが懸念されている。さらに、地域の人口が減少し自治体の文教予算が縮小していく中で、ガイドの確保あるいは展示施設の充実が実質的に困難になっている事例も見受けられる。

世界遺産暫定登録リストに掲載されたことにより、今後、見学者が増えてくることも予想されるが、その際に縄文遺跡の価値を伝えるガイダンス施設やガイドが十分対応できていなかったり、インタープリテーションの内容自体が不十分であったりしては、見学者を失望させてしまう恐れがある。そうしたことが、新たな見学者やリピーターを減少させてしまう要因となる。

このような状況を踏まえると、縄文遺跡を観光資源として活用していくためには、遺跡ガイドの確保と養成に優先的に取り組む必要がある。そのためには、大学の考古学研究室や博物館の学芸員など専門家の協力が不可欠であり、遺跡を保存・管理する各自治体には、これらの関係者と協働しながら、しかも四道県の連携という枠組みがあることのスケールメリットを活かしながら、人材育成のための施策や事業を実現していくことが求められる。

その際に留意すべきことは、可能な限り地域の中で人材を養成していくことである。より多くの地域住民が遺跡に関する知識を深めその意義を理解することによって、地域に貴重な資源が存在することの自覚と誇り、希望と期待が生まれてくる。また、地元住民が主要な役割を果たすことで、外部の観光事業者に過度に依存しない、いわゆる「自律的観光」を実現する可能性も生まれる（石森、2007）¹⁰。幸い、各地の縄文遺跡にはボランティアガイドとして活躍している住民がすでに存在しており、そのメンバーが核となって裾野を広げていくことが期待できる。

考古遺跡のボランティアガイド養成に関しては、仙台市の取り組みが注目される。仙台市は、1997（平成9）年から「市民文化財研究員」制度を創設・運用している¹¹。その仕組みは、

- ① 考古遺跡の発掘調査などにかかわり、考古学などに関心をもった18歳以上の市民を毎年15名公募する、
- ② 市民研究員に選ばれた個人は、週1回程度、1年間学習活動を行うと共に、博物館の学芸員の指導のもと、個人が自主的に設定したテーマに沿って研究レポートを作成する、
- ③ 研究活動修了後、希望者はボランティアとして更に半年間の研修を受け、展示解説やイ

ベントスタッフとして活動する、
というものである。制度開始後 10 年間で 50 名以上のボランティアが育っており、現在、
富沢遺跡保存館（仙台市太白区）で活躍している。

国においても、文化庁が 2007（平成 19）年度から「文化財サポーター制度（仮称）の構築に関する調査研究」を実施し、地域における文化財の保存と活用に対する民間団体、NPO 法人等の活動状況等に関するデータ収集を行っている。これは、文化審議会の報告において、「社会全体で文化財を継承していくための具体的な方策」として「人々の文化財保護活動に対する支援の枠組みづくり」を国が行っていくことが重要、との提言がなされたことも踏まえている¹²。

このように、遺跡ガイドの育成・確保やその団体への支援についての重要性は国においても認知され始めており、四道県がその動きを先取りしていく意義は大きい。

（２） 資格制度の創設と雇用の創出

西山（2001、前掲）によれば、「日本の考古遺跡は発掘現場が一番面白く、整備されるとつまらなくなる」そうであるが、地域の住民の立場から言わせると、遺跡は、その発掘調査が行われている間は地域に働く場をもたらすが、調査が終わり、遺跡が整備されてしまうとお金にならなくなる、ということになる。

遺跡が発見されるきっかけとしては、道路建設や工業団地などの造成工事に代表されるような、いわゆる公共事業絡みが最近では多く見うけられる。その場合、遺跡の発掘調査は原因者負担で行われる。

発掘作業にあたるのは、遺跡周辺に居住する住民であるが、遺跡が発見される場所は、特に北海道・東北地方においては国道のバイパス工事や高規格道路（高速道路）の建設に伴うことが少なくなく、市街地とは離れた中山間地域¹³が現場になる（図 4-5）。

そのような地域における主要産業は農林水産業といった 1 次産業であり、発掘作業員として雇用される地域住民もそうした本業との兼業として参加している。



図 4-5 国道のバイパス工事に伴い発見された遺跡の現場（函館市南茅部地区）

発掘作業による日雇い賃金は地域によって多少異なると思われるが、北海道の場合は、

作業経験等に応じて1日5千円から7千円程度である。土・日曜日は基本的に作業を行わないため、1カ月間で実働20日間前後、10万円から15万円程度の収入になる。

道内のある発掘現場で作業に従事する住民は、近くに働く場も容易に見つからない中で、遠方まで出稼ぎに行かなくともこれだけの収入が得られることだけでも非常に助かると話す(図4-6)。そのような意味で、規模の大きな遺跡で発掘作業が長期間継続されるような場合は特に歓迎されている。



図4-6 遺跡において発掘調査作業を行う地元住民(函館市南茅部地区)

遺跡を有する地域にとって望ましいのは、遺跡の発掘調査が終了し遺跡公園などとして整備された後でも、収入を得られる場となることである。

このような観点からすれば、縄文遺跡におけるガイドがボランティアベース、すなわち無償で行われるよりは、有償で行われる方が望ましいと言える。もちろん、有償となれば、その対価に見合ったインタープリテーションの中身や質が当然問われる。

そのためにも、縄文遺跡ガイドが職業として成立するよう、先に取り上げた仙台市の取り組みのような資質向上のための制度を整備する必要がある。と同時に、一定以上の知識・能力を備えたことを公的に保証する、いわば「縄文遺跡ガイド資格」というような制度の創設も必要であろう。

こうした資格制度は、全国規模での適用を想定すれば国が整備するのが適当であるが、「北の縄文」に関しては、まずは四道県のエリアで先行して整備し採用していくことも可能である。これまで、財政難や人口減少等で市町村や道県といった単独の枠内での人材確保に苦慮していた自治体も、そのような人材を連携しながら育成し、広域で共有することができる、というメリットが生まれるはずである。

資格を有した遺跡ガイドは、特定の遺跡に常駐しなくとも、北の縄文エリア内ではどこでも活躍する場が存在する。それは、例えば修学旅行などにおいて複数の縄文遺跡を訪れる場合に、一団に同行してガイドするようなことも可能にする。

札幌市内の旅行会社では、2008(平成20)年春から「北の縄文」をバスで巡るツアー商品を企画し催行し始めている。このようなツアーにおいて、縄文遺跡の価値を十分理解し

たガイドが添乗し、各遺跡におけるインタプリテーションを一貫して、あるいは役割分担しながら担当することで、参加者の一層の理解と満足感を高めることが可能となる（図4-7）¹⁴。

「北の縄文」遺跡ガイド資格制度の創出は、このように遺跡観光の内容を充実させるだけでなく、縄文遺跡に関わる地域住民に新たな働く場と副収入をもたらすことになる。



図4-7 北海道や北東北の縄文遺跡を巡るツアー企画の一例

4-3 「北の縄文」と広域連携

(1) 縄文の「イズム」とツーリズム

縄文遺跡の展示館などを訪れると、体験型メニューとして縄文土器・土偶づくりや勾玉づくり、火起こし体験、弓矢づくり、釣針づくりなどが行われている。発掘作業の疑似体験として、出土品水洗い体験、土器接合体験などを行っている施設もある。

このような縄文時代の暮らしにおける様々な作業を追体験するプログラムは、一般の観光客向けというよりは、教育面での効果を意図して小・中・高学生向けに、特に修学旅行の際のプログラムとして準備され提供されている場合が少なくない。

しかし、一般の見学者にとっては、そのような体験をすること自体を目的にして訪れる場合はともかく、それ以外の人にとっては、必ずしも関心を惹くものとは言えないであろう。追体験プログラムはまた、遺跡へ足を運ばなくとも実施可能であり、実際、遺跡とはかなり離れた場所にある博物館などで、特に夏休みや冬休みの小・中学生向けに行われているケースが見られる

（図4-8）。

先にも指摘したように、「感幸」の「場」として縄文遺跡を訪れる人は、遺跡の現場に自ら足を運び、そこで気づいたり感じたりするコト、あるいはインタプリテーションに



図4-8 冬休み親子考古学教室での勾玉作り体験（北海道埋蔵文化財センター）

より新たな発見をし、理解し、何らかの感動がもたらされることを期待する。

そのような縄文遺跡を巡るツアーは、縄文時代や縄文文化の思想や精神性、エコロジーといったものを知り、感じ、学ぶツアーとなる。換言するならば、縄文人の主義・主張、すなわち「縄文イズム (Jomon-ism=縄文ニズム)」を感じるツアーである。

ツーリズムという語も「Tour-ism (イズム)」であって、それは単なる「観光」を超えて、生きる意味を根底から問い直すような思想性が問われるものでもある。

この「縄文ニズム・ツアー Jomonism Tour」を実際に企画するとすれば、どのようなものになるであろうか。一案としては、先に事例として紹介した札幌市の旅行会社の企画のように、「北の縄文」に挙げられている遺跡群のうち、いくつか代表的な遺跡を巡るものが

考えられる。佐藤 (2002) によれば、「ツアー tour」の語源には二つの説があり、その一つは「ラテン語のtounumに由来し、大工の用いる円を描く道具を意味した」という¹⁵。その説になぞらえて、北海道・北東北地域の交通ネットワークを考慮し、札幌市または苫小牧市を出発地とした具体的な行程を描いてみると、次のような一筆書きのルートが考えられる (図 4-9)¹⁶。

1 日目は新千歳空港から空路で、または苫小牧東港からフェリーで秋田市に入り、そこからバスにより日本海沿岸自動車道と国道 7 号線を経由して北秋田市の伊勢堂岱遺跡と鹿角市の大湯環状列石に滞在。次いで、東北自動車道から八戸自動車道に入り、岩手県一戸町の御所野遺

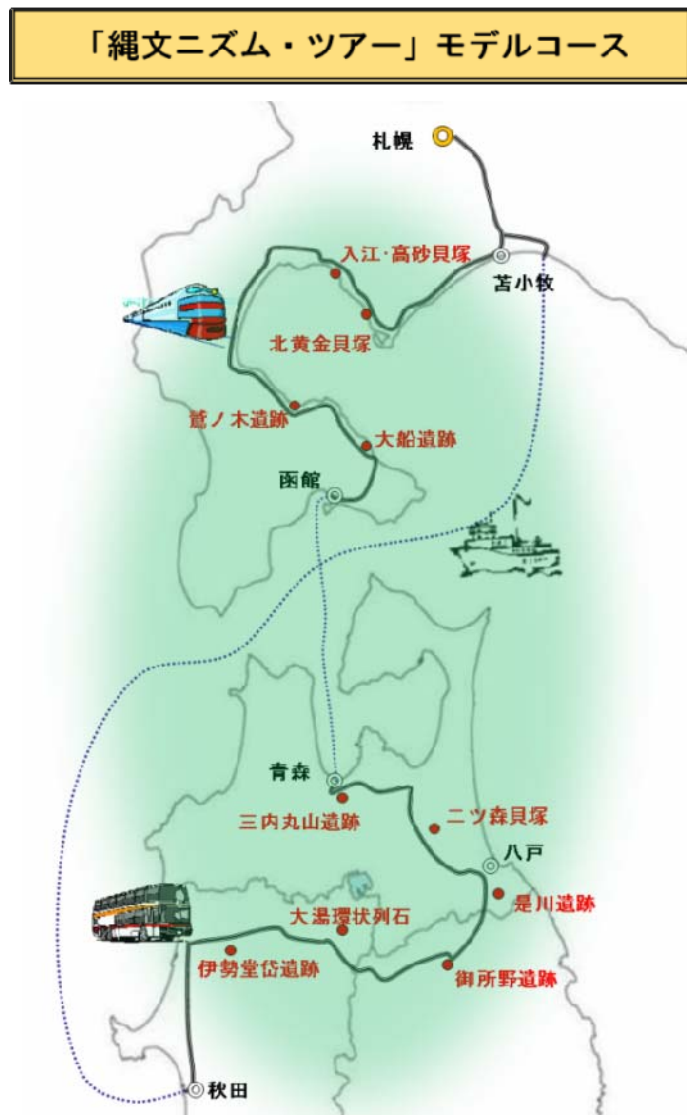


図 4-9 「縄文ニズム・ツアー」モデルコースの一例

跡を訪れた後、八戸市内で宿泊する。

2日目は八戸市の是川遺跡を訪れた後、国道4号線を北上し、青森市の三内丸山遺跡に滞在。夕方、津軽海峡をフェリーまたは鉄道で渡り、函館市内へ宿泊する。

3日目は最初に函館市南茅部地区の大船遺跡へ向かい、その後北上しながら洞爺湖町の入江・高砂遺跡や伊達市の北黄金遺跡など噴火湾沿いにある各遺跡を訪ね、苫小牧市もしくは札幌市へ戻る、というものである。

このモデルルートは、遺跡での見学時間、移動距離や移動時間等を考慮すれば3泊4日程度で無理なく移動することができ、修学旅行のプログラムなどで採用することも可能であろう。また、ルート上の乗り換え地点や宿泊地となる秋田市、八戸市、青森市、函館市などを出発地・帰着地に設定しても同様の日程でツアーが組める。現在、東北新幹線の終着駅となっている八戸市においては、仙台市や北関東、あるいは首都圏からの誘客の起点となることも可能である。

八戸市では、現在、2011（平成23）年度の完成を目指して、この地域の縄文遺跡（是川遺跡、風張遺跡など）のガイダンス施設「（仮称）是川縄文館」の建設を進めている（図4-10）¹⁷。また、函館市でも垣ノ島遺跡を中心としたガイダンス施設である「縄文文化交流センター」の整備計画を進めており、2011年度中のオープンを目指している。この施設には、北海道内で初の国宝に指定された縄文時代の土偶である「中空土偶」も展示されることになっている。



図 4-10 八戸市に建設中の「（仮称）是川縄文館」の外観模型（八戸市教育委員会提供）

折しも、2010（平成22）年12月には東北新幹線が新青森まで延伸されることが決定されており、八戸市や函館市などをはじめ関連する地域は、このようなタイミングも睨みながら連携した取り組みを行なうことで遺跡活用の効果を高めることが可能である。

ではこのルートを、鉄道を中心とした公共交通機関だけを利用して巡ることは可能だろうか。

洞爺湖町の入江・高砂遺跡（JR室蘭本線・洞爺駅）と北秋田市の伊勢堂岱遺跡（秋田内陸縦貫鉄道・小ヶ田駅）は、最寄り駅から徒歩15分前後でたどり着くことができる。青森市の三内丸山遺跡や伊達市の北黄金遺跡の場合は、それぞれJR青森駅、JR伊達駅からバ

スを利用することによりアクセス可能であるが、それ以外の遺跡は駅からかなり離れたところに位置しており、鉄道と徒歩だけでは現実的に辿りつくことが困難である。

現時点では、「北の縄文」にリストアップされている15遺跡のうち最寄り駅があるのは半数ほどであるため、今後、「北の縄文」を訪れようとする人々が、自分なりの「縄文ニズム・ツアー」を組み立て巡り歩けるよう、アクセス手段や受け入れ体制の整備を行うことが重要であろう。関係自治体の中には、ローカル鉄道の利用促進効果に期待を寄せているところもあり、そのような意味でも、遺跡活用の前提条件として、アクセス手段や経路などの整備・改善が喫緊の課題となる。

(2) 広域連携戦略と地域活性化

佐藤(2002、前掲)によれば、「ツアー tour」の語源にはもう一つ説があり、それは「ラテン語の tornus、つまり粘土の塊を乗せてぐるぐる回るロクロ」である。この説にしたがえば、ロクロの「中心軸からエネルギーを得て」、「ダイナミックで造形的なツーリズム」のイメージが想起されるという。そのようなイメージをもった縄文ニズム・ツアーとはどのようなものであろうか。

ヒントとなるのは、1997年から熊本県小国町で毎年開講されている「九州ツーリズム大学」の実践例である。九州ツーリズム大学は、「ツーリズムの理念・歴史・政策・ビジネスを教授し、実践的な地域づくりコーディネーターの育成、情報ステーションさらにはネットワーク形成の場」であり、「ツーリズム大学そのものが小国のツーリズム」となっている(佐藤、2002 前掲)。

このような、いわゆるラーニング・バケーションのコンセプトを参考にして、縄文時代や縄文文化について関心のある人々を対象に、縄文遺跡の近くで滞在しながら、3~4日間の日程の中で、専門家による講義を聞いたり、地域の文化との関わりを知ったり、あるいはエクスカーションとして他の遺跡へも足を運んだりしながら縄文ニズムの理念を体感するようなプログラムが企画できる。

「縄文ニズム大学」あるいは「縄文塾」とでも命名可能なこの企画は、例えば、遺跡のボランティアガイドとして活躍している市民などを対象に、先に述べた「北の縄文」遺跡ガイド資格制度と組み合わせることによって、プログラムの修了者に対し、遺跡ガイドの資格認定をするような制度設計が考えられる。

また、そうした特定の対象者に限らず、一般の参加者も気軽に参加できるようなプログラムを設定することも可能である。

例えば、一戸町の御所野遺跡の近くには、座敷童子の伝説で人気のある金田一温泉（二戸市）があるが、そこを宿舎としながら、縄文時代から受け継いできた漆に関わる技術や文化をテーマとした「講義」を受け、地域の伝統的な漆工芸品である浄法寺塗の制作現場を見学する「フィールドワーク」を組み合わせる。エクスカージョンでは、八戸市の是川遺跡へ赴き、そこで出土した漆塗りの注口土器などとの「比較研究」を行う、というようなプログラムはどうだろうか。

北海道の場合であれば、「縄文塾」を洞爺湖温泉で開講し、同町の入江・高砂貝塚や隣の伊達市にある北黄金貝塚を題材に講義やフィールドワークを実施する。また伊達市噴火湾文化研究所など地域の歴史・文化に詳しい研究機関の協力を得ながら、例えば、縄文時代にこの地域で主要な食糧となっていた魚介類などに着目し、海の恵みと縄文時代の食文化をテーマとした研究や、フィールドワークにホエールウォッチング（室蘭市）なども取り入れたユニークなプログラムが構想できそうである。

このような企画は、実際に地域の様々な資源をよく知る地元の人々、具体的には伝統工芸職人や漁業従事者なども参画してもらい、講師役を努めてもらうことが理想であり、また可能であろう。宿泊先も、温泉旅館等に限らず地域の農家民宿などに分宿するようにすれば、まさに地元の人々とコミュニケーションを深め、交流することが現実のものとなる。そうした地域の人々が「中心軸」となったプログラム設計の上に、外部から様々な人々が集い、交流し、「歓交（かんこう）¹⁸」することで、「ダイナミックで造形的なツーリズム」が生まれる。

更に、その実現のための行動力と実効ある連携や協働が、地元の観光協会をはじめ、行政や教育委員会、商工団体などにも求められる。

石森（2007、前掲）は、「地域資源を見直し、自分たちの意思で自律的に観光振興を図る」ことが自律的観光であり、そこには民産官学の連携が不可欠であると指摘している。

そのような連携や協働を進める際、現実には、どのような個人あるいは組織・団体が中核になるのかということが鍵になる。

前章で取り上げた「北の縄文文化回廊づくり推進協議会」がどの程度その役割を担うことができるか、可能性は今のところ未知数であるが、ここまで論じてきたように、「北の縄文」を巡るツーリズムを創造するためには、各遺跡のボランティアガイドやその人々から構成される団体・組織が中心軸となっていくことが必須であろう。

一方、現在、北東北三県においては、各県の観光施策担当部課が事務局となり、三県の観光連盟・協会やJR東日本等により組織される「北東北三県観光立県推進協議会¹⁹」が存在する（図 4-11）。この協議会は、首都圏においてはもちろんのこと、九州（福岡県）や関西圏（大阪府）などでも北東北三県への観光客誘客のための各種事業を展開しており、北海道では、修学旅行誘致のため道央圏の公立中学校教員を対象とした「教育旅行情報交換会」を開催するなどの活動を行っている。

しかし、2007（平成 19）年に東北六県に新潟県を加え「東北観光推進機構」が設立されたことにより、北東北三県という枠組みでの事業展開や役割が曖昧になりつつあり、事業予算も縮小の方向に向かっている。

そのような状況を踏まえて提言するならば、「北の縄文」を観光資源として捉え、新たな事業の柱の一つとして据えたうえで、関係自治体や業界団体のみならず、現在の枠組みに入っていない北海道の観光行政部門はもちろんのこと、遺跡を有する市町の観光協会や商工団体、上述した「北の縄文文化回廊づくり推進協議会」なども巻き込みながら、縄文遺跡群の活用と地域活性化にむけた「協働」作業に取り組んでいくべきである。

2008（平成 20）年 10 月に発足した観光庁では、複数の観光地が連携して 2 泊 3 日以上滞る型観光を実現できるよう、魅力ある「観光圏」の形成を促す目的で関連する法律の整備を行った。

この法律で定める「観光圏整備実施計画」を策定し、それに基づく観光圏整備事業を実施する場合には、事業費に関する補助金が交付される²⁰。

事業費の補助スキームには様々なものがあるが、例えば、ここまで指摘してきたいくつかの課題について言及すれば、「縄文塾」の開講や運営については「観光圏体験・交流・学習促進整備事業費」や「宿泊魅力向上事業費」、遺跡ガイドの育成については「観光圏人材育成事業費」、遺跡へのアクセス手段の検討・改善については「観光圏交通整備事業費」や



図 4-11 北東北三県観光立県推進協議会が運営するホームページ

「観光圏情報提供事業費」などのスキームが活用できるはずである。

また、「北の縄文」の遺跡の多くが農山村に位置していることに着目すれば、遺跡周辺の自然や農村の生活空間なども、整備された遺跡公園の景観と一体的に捉えることによって、地域に新たな魅力を付加することができるのではないか。先に「縄文塾」の開講にあたって農家民宿の利用に言及したが、そのような農山漁村地域での滞在・交流活動を促進するような事業の場合には、農林水産省の「農山漁村活性化プロジェクト支援交付金」などの活用も可能となる。

このように、「北の縄文」は文化遺産を所管する文化庁の枠内に留まらず、観光庁や農林水産省、あるいは総務省²¹など国の機関による補助事業制度をうまく利用できる要素を持ち合わせており、四道県は、そのような多面的・横断的な手法と予算（資金）を組み合わせながら、地域活性化への具体的な事業展開へ向けて早急に取りかかるべきであろう。

【注】

- ¹ 澤村 明 (2006) : 縄文遺跡保存と活用のあり方—三内丸山遺跡・御所野遺跡を事例とした経済効果の測定を手がかりに—, 「文化経済学 第5巻第2号」, pp. 47-54
- ² 青森県教育委員会 (2008) : 「三内丸山遺跡 年報 (平成19年度)」, pp. 12-13
- ³ 山村高淑 (2006) : ヘリテージツーリズムをデザインすることの意義とその思想, 「観光デザイン学の創造」, pp. 113-138
- ⁴ 図4-2の画像は、岩手県一戸町ホームページの「御所野縄文公園」から転載 (第2章注2に同じ) [御所野縄文博物館承認]
- ⁵ 石森秀三 (2008) : 観光立国時代における観光創造～ライフスタイル・イノベーションとネオツーリズム～, 「北海道大学観光創造フォーラム『ネオツーリズムの創造に向けて』報告要旨集」, p10
- ⁶ 石森秀三 (2008) : 上掲書, p9
- ⁷ 勅使河原 彰 (1995) : 上掲書 (第2章 注16), pp. 202-204
- ⁸ 小山修三 (2002) : 「森と生きる 対立と共存のかたち」, pp. 43-69
- ⁹ イギリスのストーンヘンジ (約5千5百年～3千5百年前) では、夏至の日、環状列石の中でも、馬蹄形に組まれた五つの三石塔の間とヒールストーンを結ぶ延長線上から太陽が昇る。アイルランドのボイン渓谷の考古遺跡群におけるニューグレインジ古墳 (約5千年前) では、冬至の日の出の十数分間だけ古墳の開口部から朝日が入り、中央の墓室を照らす。メキシコのテオティワカンの古代都市におけるピラミッド型神殿 (約2千2百年前) では、夏至の日と同都市における最大規模の神殿「太陽のピラミッド」の正面に太陽が沈む。
- ¹⁰ 石森秀三 (2007) : 観光立国時代における観光創造, 「大交流時代における観光創造」, pp. 19-20
- ¹¹ 内容は、仙台市富沢遺跡保存館 (通称「地底の森ミュージアム」) ホームページの記述を参照した <http://www.city.sendai.jp/kyouiku/chiteinomori/index.html>
- ¹² 内容は、文化庁ホームページ <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/index.html> および「文化財サポーターフォーラム」のホームページの記述を参照した <http://www.kuba.co.jp/bunkazai-supporter/#3>

-
- ¹³ 「中山間地域」とは、食料・農業・農村基本法第三十五条では、「山間地及びその周辺の地域その他の地勢等の地理的条件が悪く、農業の生産条件が不利な地域」と定義されている。一般的には「平地の周辺部から山間地に至る、まとまった平坦な耕地の少ない地域」とされることが多い。
- ¹⁴ 図 4-7 は、株式会社シービーツアーズ（札幌市中央区大通東 1 丁目）が 2008 年度に募集・催行したツアーの広告。
- ¹⁵ 佐藤誠（2002）：「グリーンホリデーの時代」，pp. 100-102
- ¹⁶ ここでは、貸し切りバスを主な移動手段と想定している。
- ¹⁷ 図 4-10 の画像は、八戸市教育委員会（文化財課）提供のもの。[八戸市教育委員会承認]
- ¹⁸ 吉田順一（2008）：ソーシャライジングとしての〈歓交〉～「社交する幸せ」を忘れた日本人，「まほら No. 56」，pp. 20-21
- ¹⁹ 会員は、青森県、岩手県、秋田県の各商工労働/産業経済部の観光施策担当部署と JR 東日本盛岡支社、秋田支社、青森支店、それに社団法人日本観光協会東北支部、青森県観光連盟、岩手県観光協会、秋田県観光連盟からなる。このほか、各県町村会、市長会、各県旅館ホテル生活衛生同業組合、タクシー協会、バス協会、商工会議所連合会、大手旅行代理店各県支店、航空会社 2 社などが参与として名を連ねている。協議会の運営費・事業費は、これら会員からの会費（負担金）で賄われている。／図 4-11 の画像は、同協議会ホームページのトップページから転載 [北東北三県観光立県推進協議会事務局 (H20 年度 HP 担当：岩手県) 承認]
<http://www.north-tohoku.gr.jp/>
- ²⁰ 補助率は事業費の 40% を上限とする。
- ²¹ 総務省が平成 19 年度から募集・採択している「頑張る地方応援プログラム」による交付税措置を想定。

終章 観光立国と「北の縄文」

(1) 暮らしといのちを輝かすツーリズム

2006（平成 18）年 12 月、わが国では、観光立国の実現に向けて、観光立国推進基本法が成立したが、その前文の一節には次のように謳われている。

「観光が（中略）地域の住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会の実現を促進し、我が国固有の文化、歴史等に関する理解を深めるもの（中略）であることを確信する。」

物的所有欲の充足よりも精神的豊かさ、「幸せの実感」を求める生き方へと日本人のライフスタイルが大きく転換しようとしている今日、我々は、自らの住む地域社会に愛着と誇りをもって、「心身を安らげ、楽しく生き活きと暮らすこと（佐藤、2002）¹」を望む。

そのための指針あるいは生き方の一つのモデルとして、本研究では、わが国に特徴的な考古遺跡である縄文遺跡・縄文文化の内に、自然と共存・共栄・共生し、家族や共同体を強く意識しながら、他の共同体との交流と交易を通じて持続可能な生活様式を営んでいた縄文時代の人々の姿勢方針を見出した。

そして、その生活様式は、物質文明の源である世界四大河文明よりも遙かに遡って存在し、1 万 2 千年以上の永きにわたって継続したという意味で、世界的意義を持つものであることも明らかになった。

そのような思想的な営みを「縄文ニズム Jomonism」と呼べば、「北の縄文」をめぐるツーリズムは、縄文ニズムを五感で感得するものとなり、「観光」は「感幸」あるいは「歓交」へと変異するのである。

換言すれば、縄文遺跡は、遺跡周辺の景観や伝統工芸品をはじめとする地域の生活文化なども組み込んだ上で、訪れた人々のライフスタイルに影響を及ぼすような「感動を与える空間」あるいは「物語性を有した空間」となり得るのであり、そのようなライフスタイル・イノベーションをもたらすツーリズムの在り方が、今求められている。

岡本太郎と「火焰式土器」の出会いは芸術分野に革新的（イノベティブ）な影響を与えたが、観光立国の実現に向けては、そのような出来事が観光の分野で惹起することが期待されているのであり、それは「地域の暮らしといのちを輝かせ（佐藤、前掲）」、地域経済を再生へと導く観光の在り方を模索する「ツーリズム・イノベーション Tourism Innovation²」に他ならない。

「北の縄文」というテーマは、そのようなツーリズム・イノベーションを惹起する、重要なツーリズムのイズムとしての価値を有しているのである。

(2) 「いくつもの日本」の視座と「北のゲートウェー」

第2章で示したように、「北の縄文」は北海道においては縄文人からアイヌへのつながりに光を当てる。その文化においては、サハリンやロシア極東地域、アムール川流域の少数民族との係わりがあることについても触れたが、第4章においては、「北の縄文」におけるモニュメントが、アリューシャン列島から更に東へ至って、ハイダ民族など北米大陸西部の先住民族の文化との関係性を想起させることも示した。

このことは、篠田（2007）による研究成果によって裏付けられる。篠田は、関東と北海道で発見された縄文時代の古人骨からDNAを採集し、分子人類学の立場から、現代の本土日本人と北海道アイヌ、沖縄の3つの現代人集団と比較・検討した³。その結果、北海道の縄文人における特徴的な塩基配列が北アメリカの先住民と同じタイプであることを明らかにしている。

日本人の成り立ちに関する埴原和郎の「二重構造説⁴」は、今日、広く支持されている学説であるが、その説に従えば、日本列島が縄文時代から弥生時代へと時代が変遷していく中で、本州、特に現在の関東以西では「在来（縄文）系」の人々と「渡来（大陸）系」の人々が混在して暮らしていた。

同時期、北海道においては縄文時代から続縄文時代、擦文時代へ

表 5-1 北海道における考古学年表

	北海道	本州（四国・九州）
	旧石器時代	旧石器時代
	縄文時代	草創期
		早期
		前期
		中期
		後期
	晩期	
年代	道東 道南	
300	続縄文時代（前期）	弥生時代
500	オホーツク文化	古墳時代
700	続縄文時代（後期）	飛鳥時代
900	擦文時代	奈良時代
1100		平安時代
1300	アイヌ文化	鎌倉時代
1500		南北朝時代
		室町時代

と推移し、サハリンから北海道東部のオホーツク海沿岸に南下してきた「オホーツク人」と縄文人あるいは擦文人が混血していった（表 5-1）。北海道では、そのような経緯により西部と東部で異なる文化圏が形成されていく（瀬川、2007）⁵。

2007（平成 19）年、北海道は「北海道東部の窪みで残る大規模竪穴住居跡群」として、オホーツク海沿岸に所在する常呂遺跡（北見市）や標津遺跡群（標津町）を世界遺産候補地として提案したが、これらの遺跡では、縄文時代から続縄文時代を経て、擦文、オホーツク文化期、そしてアイヌ文化期に至るまでの範囲で、遺物や遺構が重なり合って出土している⁶。

このように、縄文時代から現代へという時間軸とユーラシア大陸から北米大陸へという空間軸を当てて「北の縄文」を捉えると、そこを中心に多様な民族が行き交い混じり合っ、様々な文化を生んできた様子が浮かび上がってくる（図 5-1）⁷。日本列島および日本人は、そのような成り立ちからすれば、実際は単一民族どころではなく、ルーツにおいては多民族国家であったと言える。

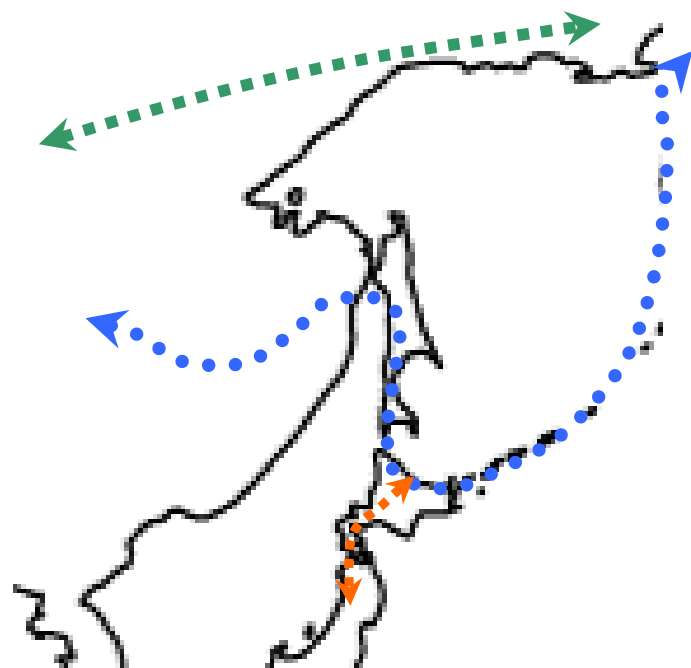


図 5-1 ユーラシア大陸東端から環オホーツク海域にかけての民族移動・交流のイメージ

このような「いくつもの日本」

という視座に立てば、「北の縄文」すなわち北海道・北東北三県が北東アジアへの「北のゲートウェイ」として見えてくるのである。

わが国は、北東アジアの近隣諸国との間で、領土・領海やエネルギー、海洋資源、食糧、歴史認識などにおいて様々な課題を抱えている。

こうした状況において、ツーリズムによる交流の促進、異文化理解の促進は 21 世紀のわが国における観光戦略であると同時に重要な外交戦略、平和戦略となる。

縄文遺跡、縄文文化をグローバルな新しい繋がりへの発見へのモニュメントそしてモーメントとして捉え、現代における諸課題への解決策を見出す糸口とすべきではないか、ということを経済にもう一度指摘しておきたい。

観光創造としての「北の縄文」で新たな歴史の一頁を書き記したいものである。

【注】

- ¹ 佐藤誠（2002）：上掲書（第4章 注12），pp. 85-90
- ² 石森秀三（2008）：観光革新、国家的課題に、「今を読み解く」，2008年11月9日付け日本経済新聞掲載記事
- ³ 篠田謙一（2007）：「日本人になった祖先たち～DNAから解明するその多元的構造」，pp. 161-186
- ⁴ 埴原和郎（1927-2004：自然人類学者）により提唱された、日本人の成り立ちに対する形質（自然）人類学の立場からの学説。現在の日本人の形質は縄文時代から弥生時代において、在来系の縄文人と大陸系の渡来人が混血した結果できあがってきたものであって、弥生時代には縄文系（掘りの深い顔立ちが特徴）と渡来系（比較的平板な顔立ちが特徴）の「弥生人」が混在していた。今日でも渡来系の影響の強い西日本と縄文系の形質の残る東日本や北日本、あるいは九州・沖縄地方では、そうした差異が確認できるという。
- ⁵ 瀬川拓郎（2007）：「アイヌの歴史～海と宝のノマド」，pp. 14-29／表5-1は、同書p. 17より一部抜粋し転載したもの。
- ⁶ 北海道・北見市・標津町（2007）：世界遺産暫定一覧表に係る提案書「北海道東部の窪みで残る大規模竪穴住居跡群」
- ⁷ 図5-1はテッサ・モーリス=鈴木著「辺境から眺める～アイヌが経験する近代」（2000）を参考に作図した。

謝辞

本研究論文の執筆にあたり、直接ご指導いただいた佐藤誠教授には厚く御礼申し上げたい。

また、函館市教育委員会生涯学習部参事の阿倍千春氏には、函館市南茅部地区における縄文遺跡発掘現場の案内や様々な資料をご提供いただくなど、そのご配慮とご協力に心から感謝申し上げたい。

同じく、「北の縄文」に関する情報や資料提供をいただいた以下の方々にも、この紙面を借りて感謝申し上げたい。

- ・北海道農政部参事監 荒川 裕生 氏
- ・北海道生涯学習推進局文化・スポーツ課主査 長沼 孝 氏
- ・函館市教育委員会生涯学習部文化財課学芸員 吉田 力 氏
- ・青森県教育庁文化財保護課主幹 赤尾 芳伸 氏
- ・青森県企画政策部政策調整課主査 松尾 義人 氏
- ・秋田県教育庁生涯学習課主査 五十嵐 一治 氏

*所属、職名は2008(平成20)年12月現在

最後に、本大学院での研究活動を行う機会を与えていただいた秋田県産業経済労働部に感謝するとともに、この2年間の学びの成果を秋田県における様々な施策・事業に活かしていけるよう、引き続き努力していきたい。

参考文献一覧

序章

- ・藤本 強 (1988) : 「もうふたつの日本文化」, 東京大学出版会
- ・神野直彦 (2008) : 「地域再生へのアジェンダ」, 農林水産政策研究所レビューNo. 28
- ・内閣府 (2008) : 第1章 第3節 社会の主体としての消費者・生活者～幸福の探求, 「平成20年版国民生活白書」, 内閣府国民生活局
- ・岡本太郎 (1956) : 「日本の伝統」, 光文社
- ・袖川芳之・田邊 健 (2007) : 幸福度に関するインターネット調査報告書, 内閣府経済社会総合研究所
- ・戸沢充則 (1995) : はじめに, 戸沢充則編「縄文人の時代」, 新泉社

第1章

- ・ゴードン・チャイルド V. Gordon Childe (1969) : ねず まさし訳「文明の起源(上)」, 岩波新書
- ・小林達雄 (2008) : 「縄文の思考」, ちくま書房
- ・松木武彦 (2007) : 「全集 日本の歴史第一巻 列島創世記」, 小学館
- ・松本 健 (1996) : メソポタミアにおける都市文明の誕生, 金関恕・川西宏幸編「講座 都市と環境4 都市と文明」, 朝倉書店, pp. 30-41
- ・黛 弘道ほか13名 (1998) : 「詳解 日本史B 改訂版」, 清水書院
／尾形勇ほか7名 (1997) : 「世界史B」, 東京書籍
- ・樋泉岳二 (2001) : 貝塚の時代～縄文の漁労文化, NHK スペシャル「日本人」プロジェクト編「NHK スペシャル 日本人はるかな旅 第3巻 海が育てた森の王国」, NHK 出版, pp. 127-143
- ・コリン・レンフルー Colin Renfrew (2008) : 小林朋則訳「Prehistory 先史時代と心の変化」, ランダムハウス講談社
- ・佐藤洋一郎 (2007) : 地球環境と焼畑, 東北芸術工科大学東北文化研究センター編「季刊 東北学 第11号 (2007年春)」, 柏書房, pp. 50-55
- ・鈴木孝夫 (2006) : 「日本人はなぜ日本を愛せないのか」, 新潮選書
- ・常木 晃 (1995) : 西アジア型農耕文化の誕生, 梅原猛・安田善憲編「講座 都市と環境3 農耕と文明」, 朝倉書店, pp. 127-142
- ・梅原 猛 (1995) : 総論 農耕と文明, 梅原猛・安田善憲編「講座 都市と環境3 農耕と文明」, 朝倉書店, pp. 1-22

- ・安田喜憲 (1995) : 農耕の起源と環境, 梅原猛・安田善憲編「講座 都市と環境 3 農耕と文明」, 朝倉書店, pp. 116-126

第2章

- ・土橋陸夫 (2006) : 特集号「自然との共生 草木塔」編集の背景, 山形環境保全センター編「環境保存 No. 9」, コロニー印刷, p. 47
- ・木村治美 (1997) : 心をこめて家族の時間, 中根千枝・松原治郎・木村治美「家族を考える」, リブリオ出版, pp. 161-220
- ・小林達雄 (1995) : 縄文時代の自然の社会化, 小林達雄編「季刊考古学・別冊 6 縄文時代における自然の社会化」, 雄山閣出版, pp. 73-81
- ・町田宗鳳 (2000) : 「縄文からアイヌへー感覚的叡智の系譜」, せりか書房
- ・西山徳明 (2001) : 自律的観光とヘリテージ・ツーリズム, 石森秀三・西山徳明編「国立民族学博物館調査報告 21 ヘリテージ・ツーリズムの総合的研究」, pp. 21-36.
- ・大木 昌 (2005) : 「関係性喪失の時代～壊れてゆく日本と世界」, 勉誠社
- ・尾本恵市 (1996) : 「日本人の起源」, 裳華房
- ・佐藤洋一郎 (2005) : DNA 分析でよむクリ栽培の可能性, NHK 三内丸山プロジェクト・岡田康博編「縄文文化を掘るー三内丸山遺跡からの展開」, 日本放送出版協会, pp. 119-130
- ・田嶋謙三・神田エリ (2008) : 「森と人間～生態系の森、民話の森」, 朝日選書
- ・勅使河原 彰 (1995) : ケとハレの社会交流, 戸沢充則編「縄文人の時代」, 新泉社, pp. 179-206
- ・梅原 猛・埴原和郎 (1982) : 「アイヌは原日本人か」, 小学館
- ・梅原 猛 (2005) : 縄文文化・縄文の心を語る, 「縄文ジャーナル 2005 夏 縄文人の心」, たちばな出版, pp. 1-7
- ・宇田川 洋 (1989) : 「イオマンテの考古学」, 東京大学出版会
- ・山田昌久 (2001) : 縄文人の村づくり～その植物と道具の駆使, NHK スペシャル「日本人」プロジェクト編「NHK スペシャル 日本人はるかな旅 第3巻 海が育てた森の王国」, NHK 出版, pp. 159-174
- ・山田昌久 (2004) : 森を使う縄文人, 梅原猛編「縄文人の世界-日本人の原像を求めて」, 角川学芸出版, pp. 204-227

第3章

- ・北の縄文文化回廊づくり実践プログラム検討チーム（2004）：「北の縄文文化回廊づくりアクションプログラム」，北海道・青森県・岩手県・秋田県
- ・青森県・青森市・八戸市・つがる市・七戸町（2006）世界遺産暫定一覧表に係る提案書「青森県の縄文遺跡群」／秋田県・鹿角市・北秋田市（2006）世界遺産暫定一覧表に係る提案書「ストーンサークル」
- ・文化庁（2007）：（別紙5）継続審議とすることが適当とされた文化資産，「世界文化遺産特別委員会における調査・審議の結果について（平成19年1月23日付）」，文化審議会文化財分科会世界文化遺産特別委員会報告書
- ・文化庁（2008）：（別紙7）世界遺産暫定一覧表記載文化資産，「我が国の世界遺産暫定一覧表への文化資産の追加記載に係る調査・審議の結果について（平成20年9月26日付）」，文化審議会文化財分科会世界文化遺産特別委員会報告書
- ・文化庁文化財部記念物課（2008）：（報道発表資料）「我が国の世界遺産暫定一覧表への文化資産の追加記載について（平成20年12月15日付）」
- ・北海道・青森県・岩手県・秋田県（2008）：「北の縄文文化回廊づくり事業実績報告書」，岩手県教育委員会発行
- ・北海道・函館市・伊達市・森町・洞爺湖町・青森県・青森市・八戸市・つがる市・外ヶ浜町・七戸町・岩手県・一戸町・秋田県・鹿角市・北秋田市（2007）世界遺産暫定一覧表追加資産に係る提案書「北海道・北東北の縄文遺跡群」
- ・国土交通省国土計画局（2002）：縄文遺跡の連携による地域活性化手法に関する調査
- ・国土交通省東北地方整備局（2005）：「北東北のグランドデザイン」に関する地域の自立・経済の活性化方策調査報告書，「平成16年度国土施策創発調査」

第4章

- ・青森県教育委員会（2008）：「特別史跡 三内丸山遺跡 年報11（平成19年度）」
- ・石森秀三（2007）：観光立国時代における観光創造，石森秀三編著「大交流時代における観光創造」，北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院研究叢書70，pp. 1-20
- ・石森秀三（2008）：観光立国時代における観光創造～ライフスタイル・イノベーションとネオツーリズム～，「北海道大学観光創造フォーラム『ネオツーリズムの創造に向けて』報告要旨集」，北海道大学観光学高等研究センター，pp. 7-10
- ・小山修三（2002）：「森と生きる 対立と共存のかたち」，山川出版
- ・佐藤 誠（2002）：「グリーンホリデーの時代」，岩波書店
- ・澤村 明（2006）：縄文遺跡保存と活用のあり方ー三内丸山遺跡・御所野遺跡を事例とした経済効果の測定を手がかりにー，「文化資本をめぐる理論と実証 文化経済学 第5巻 第2号（通算第21号）」，pp. 47-54

- ・山村高淑 (2006) : ヘリテージツーリズムをデザインすることの意義とその思想, 桑田政美編「観光デザイン学の創造」, 世界思想社, pp. 113-138
- ・吉田順一 (2008) : ソーシャライジングとしての〈歓交〉～「社交する幸せ」を忘れた日本人, 「まほら 特集ハピネス 2008 No. 56」, 旅の文化研究所, pp. 20-21

終章

- ・篠田謙一 (2007) : 「日本人になった祖先たち～DNA から解明するその多元的構造」, 日本放送出版協会
- ・瀬川拓郎 (2007) : 「アイヌの歴史～海と宝のノマド」, 講談社
- ・北海道・北見市・標津町 (2007) : 世界遺産暫定一覧表に係る提案書「北海道東部の窪みで残る大規模竪穴住居跡群」
- ・テッサ・モーリス=鈴木 Tessa Morris-Suzuki (2000) : 大川正彦訳「辺境から眺める～アイヌが経験する近代」, みすず書房